

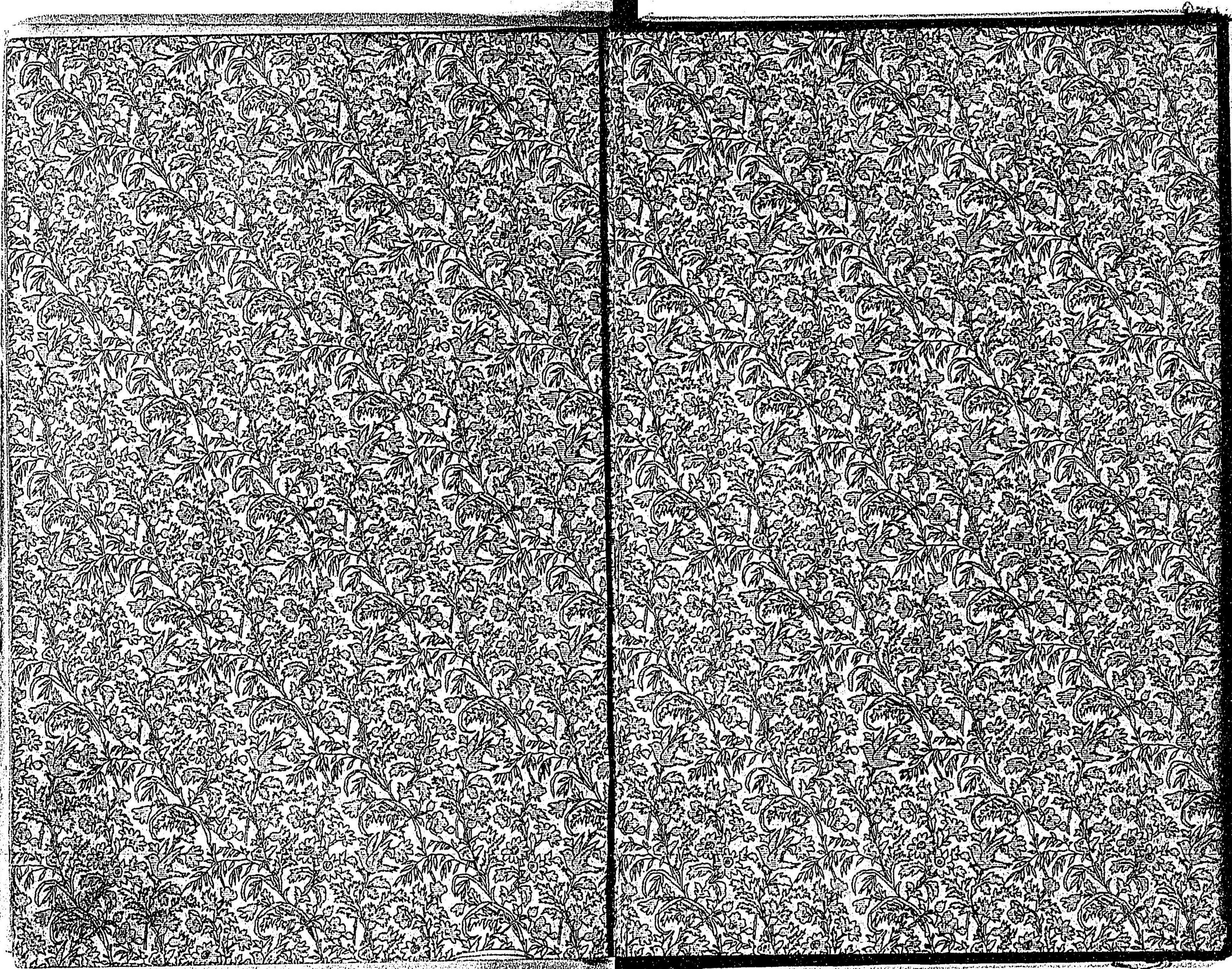
Nov. 1911. - Sagittarius

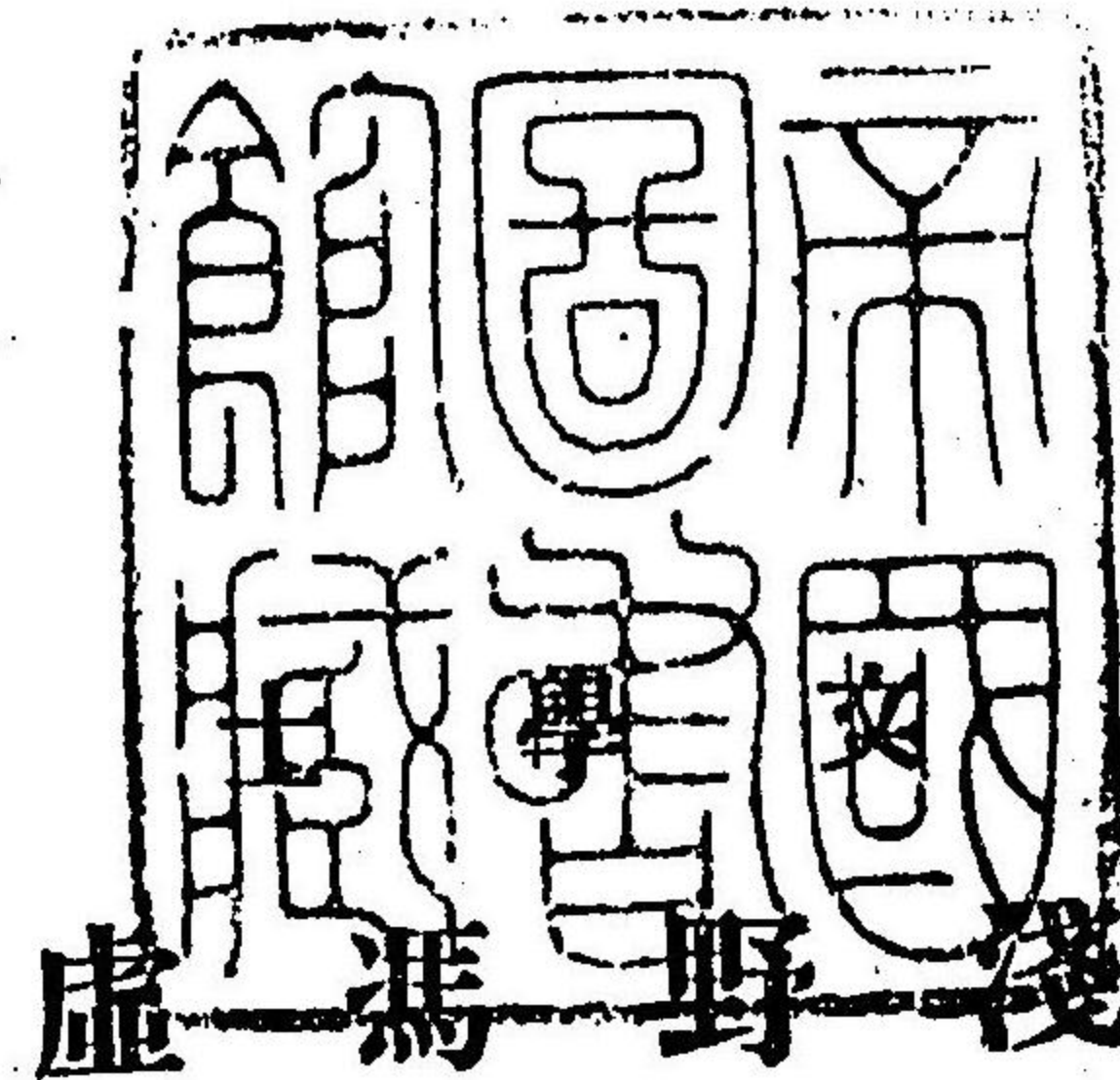
78

69



浅野 户
野 澤
鳴 姑
靈 射
共 譯





譯

沙翁全集

第三卷

ヴェニスの人商

發兌

大日本圖書株式會社

明治三十三年九月初版



「ヴェニス」の商人」序

沙翁

聞けば、日本國の大家達が今日集會を開き、「ヴェニス」の商人の譯者を引出して、詰問やら、注文やら、教訓やらを致すとやら。さぞ名論卓説とやらが數々出ることであらう。ストラットフォードの寺院生活もいさゝか倦いた程に、これより傍聽に出向くと致さう。急いで参つた程に、もう爰ぢやや、會議が正に始まる所ぢや。善い所に参りあはせた。

英學者 諸君、大概人數も揃つたやうであるから、我輩か

ら先づ鄙見を吐露して翻譯者の參考に供しやうと思ふ。凡そ翻譯の第一の要義は、一字一句をも忽にせず、最も忠實に原作の意味を傳ふるに在る。勿論彼我の語格に相違があるから、多少の自由は許すとしても、出來る限り原文に據らぬは不都合である。原文と離れた譯文は、例へば實物に似ぬ肖像畫のやうなものである。三文の價值がない。然るに遺憾ながら近來我邦には、此種の翻譯が流行するやうであるが、前途の爲めに大に寒心せざるを得ぬ。何うです。本篇の譯者は、この點の用意が充分届いて居りますか。

英學生

僕も英學者先生の御高見には、双手を舉げて賛成します。一般に翻譯なるものは、單に譯文として讀むばかりでなく、原作を讀む時の參考にもなるやうに願ひたいもので。

實用家

君、それは廢し玉へ。沙翁などいふ陳奮いものを讀んで、決して英語の力はつきません。三百年前の英語を、今日の英語と同一物と思つて居るなどは最も大なる間違です。今日此實用の世間に立たんとするには、萬事實用的でなければいけん。沙翁を讀んで第一英文の手紙が書けますか。この多忙の世の

中に生れ乍ら、何故に斯様な翻譯をするか、僕は先づそれから譯者に詰問したいです。

文士 其様な議論には困る。太陽の光で飯が炊けぬから太陽の光は炭に劣るといふやうな議論、君は今日の會議に出席の資格がないですな。さて只今英學者氏のお言葉に由れば、翻譯の第一の要義は、原文の一字一句を、忠實に傳ふるにありと言はれたが、我輩の眼から見れば、之は未だ一を知つて二を知らざる皮相の見である。我輩の見るところによれば、翻譯の最大の目的は、原文の妙味を邦文の上に傳ふるにある。従つ

て、外形よりは寧ろその内容、辭句よりは寧ろその精神に重きを置かねばならぬ。譯文は決して原文の奴隸ではない、獨立的價値を有するものでなければならぬ。單に辭句の末にのみ拘泥すると、其譯文は多くは晦澁、生硬、一點の生氣といふものが無く、原作に在りて、火を吐くやうな抒情的熱語が、譯文の上には、たゞ其外形のみを留めたる死語となるやうな場合が決して珍らしくない。かゝる譯文こそ三文の價値がないと我輩は思ふ。足下の今言はれた肖像畫にしても、單に頭や顔の輪廓が似て居るといふ丈では不足

ぢや。その人物の眞面目―成るべくはその精神迄が躍如として露はれんければ、決して肖像畫として上等のものとは言はれぬ。何うぢや、本篇の譯者は、此點の用意が届いて居りますか。

小説愛
讀者

アラ妾もそれに賛成てムいますわ。翻譯物といふと、大抵皆ゴツ／＼して、讀み難くて、面白くなくて、睡氣がさして、肩が張りますから、折角買つても、二三枚讀んで止めて仕舞ひますわ。此御本はスラ／＼書いてあつて？

樂隱居

序でに名前なども日本流にして戴かれますま

いか。ポルシヤやらバツカニオやらでは、露西亞の軍艦の名のやうで、記憶されはしませぬ。分捕軍艦でも日本流の名前に改稱したではムりませぬか。成るべく分り易く書き換へてください。

躍起家

それには僕に名案があるです。實は分捕軍艦にも僕が立派な優美な名稱を付け換へて置いたです。が、海軍省に上申しやうとして居る中に、平凡な名を付けられて仕舞つた。ヴェニスヴェニスの商人の人物ならば、先づ斯うですナ。アントニオならば、上のアントを取つて安東とする。日本人は氣が短いから、名前などは

短かいに限る。それから高利貸のシャイロックを豺六などは名詮自稱、頗る甘いてしやう。ゴルシアを保留子姫、腰元のチリサを練子、饒舌家のグラチアノを愚良地、好男子のバツサニオを、チト苦しいが迫間、チエシカ嬢をお鹿嬢などゝするです。さうすれば、原名も思ひ出せるし、又呼び善くもなる。一舉兩得とはこの方法です。若し本篇の譯者が、まだ爰にお氣がつかれなかつたら、讀者の方で僕の流儀に勝手に名を改稱して讀むべしだ。既に西洋人が日本語で談話を^{せし}する筈は無いのであるから、名前だつても日本流に

改稱して少しも構ふことはない。翻譯者もこれには御賛成でせうな。ハイカラ黨は不賛成かも知れぬが……。

西洋通

ハイカラ黨とは何んの事です。西洋の名前が記臆されぬ位なら西洋物の翻譯などは手にせぬ方がよい。慾にはせめて五度七度は、西洋の劇場なども覗いた上でなければ、沙翁の讀者たる資格はないと言つて善い。

劇通

イヤ何にも、さう西洋くくと、醫師が患者に對するやうなことを言はんでも善い。西洋の芝居を云々

する前に、日本の芝居道のことを、チト修業して戴きたい。科白の呼吸、故人の型、音曲の配合、能狂言との關係等、中々容易に分るものではない。先づ是等につき、て少くも五七年苦勞した上でなければ、芝居の事を論ずる譯には参りません。況して脚本の翻譯などが出來ますものか。よしや翻譯したとて舞臺にはかゝりはしません。譯者と役者とはその間に自から一種の關係がある……。

評論家 眞面目の議論の席に駄洒落などは廢し玉へ。余は今迄黙つて諸君の御説をたゞ拜聽して居ました

が、兎角諸君は、沙翁の翻譯といふ事を忘れて議論するから困る。物には皆輕重本末といふものがある。よく之を辨へて、その重き所に眼光を注がねばならぬ。諸君の御注文は敢て皆不必要とは言はぬが、何うも最大の急所を見落して居る。沙翁は言ふまでもなく天下無双の大天才で、その作を見れば、詞藻といひ、趣向といひ、前後の對照といひ、又舞臺面の配置といひ、猥りに他人の追隨を許さぬものがあるが、その最大の長所は、人物の性格の描寫である。沙翁劇は性格劇である。之を土臺として一篇が成立するので、之を除

去すれば、幾多の無理、矛盾は陸續輩出して、土崩瓦解して仕舞ふ。従つて譯者の最も苦心すべき所も自から此點に歸着せねばならぬ。よく篇中の人物の性格を會得し、了解し、翫味して、そしてその性格をば、一言一句の間に發露せねばならぬ。辭句の解釋も勿論必要ぢや。詞藻の美固より發揮すべしぢや。が、それより先きに、篇中の人物が、果して明かに躍動して居るや、否やに心掛けんければならぬ。さもなければ、その翻譯は單に外形を傳へし迄で、要するに死物たるを免れませぬ。本篇の翻譯者は、充分篇中の人物の性格を

發揮したと言ひますか。早速足下の返答を伺ひたい。さア何うです。

批評家 さア譯者君、何とか返事をし玉へ。互に辯難攻撃せんければ議論に花が咲かない。僕などは平地に波瀾を作ることでも敢てする。口で言はれぬとあらば筆で書き玉へ。

記者 君が書いたら僕の雑誌に載せてあげる。何れその中……。

芝居狂 さアくく、返事は何んと？

譯者 一々御尤の御教訓、御好意の程は決して忘れま

せぬが、御返事のところは、今五六年ばかりお待ちを願ひまする。

當世才

何に？五六年？この多忙の世の中に君も迂遠なことを言ふ人だ。せめて五六分に爲玉へ。

譯者 ことによると七八年……。

一同 それでは何れ又出直さう。

と退場

沙翁 ハ、ハ、ハ、ハ、中々面白かった。

と退場

譯者 ヤ今立ち去られた人の横顔は、あれは確かに……。

と見送る

明治三十九年一月

浅野馮虚

喜劇
ヴェニス
の商人

登場人物

ヴェニス公
 モロッコ公子
 アラゴン公子
 ホルシアの求婚者

アントニオ
 ヴェニスの貿易商

パッサニオ
 前者の友にてホルシアの求婚者

ソラニオ
 サラリノ
 グラチアノ
 アントニオ及びパッサニオの友

ロレンゾ
 ナエシカの情人

シャイロック
 金持の猶太人

チュバル
 猶太人、前者の友

ランセロット・ゴボ
 道化者、シャイロックの下男

老ゴボ
 ランセロットの父

レオナルド
 パッサニオの家来

バルサザール
 ステファノ
 ホルシアの家来

ホルシア
 富家の女主

ネリサ
 前者の侍女

デエシカ
 シャイロックの娘

其他ヴェニスの諸貴族、法廷の役人、獄丁、
 ホルシアの従者、及 諸種の従者等

場所
 ヴェニス及びホルシア邸の所在地ベルモント

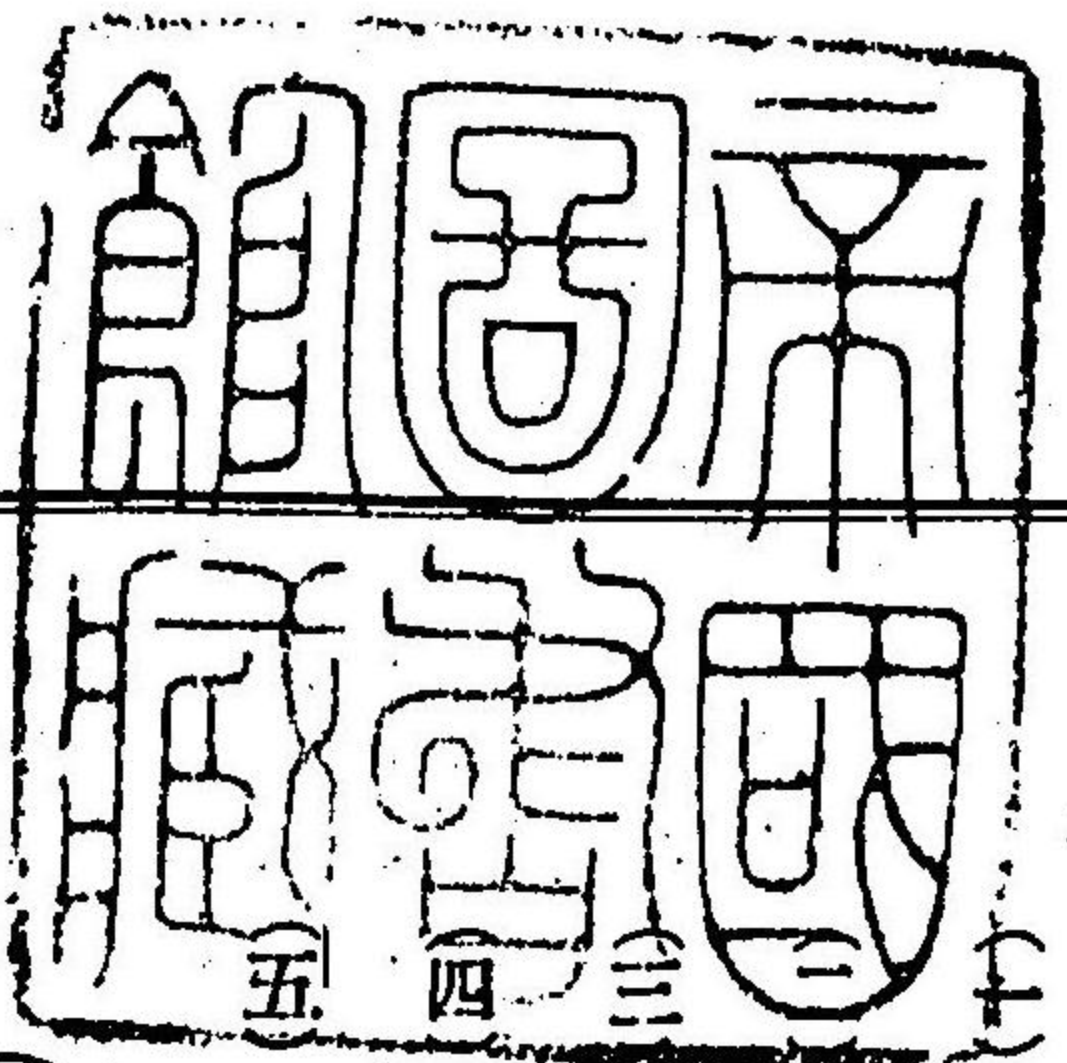
「ヴェニスの商人」に就きて

本篇の梗概
 人物の性格
 この物語の出所
 刊行の年月
 脱稿の年月

(一) 本篇の梗概

余は劈頭先づ本篇の梗概を説き、讀者をして一篇の脈絡及び篇中に活動する所の主要なる人物に親ましめんとす、元來舞臺の上に演ずべくも

ヴェニスの商人に就きて



のせられたるが故に、之を机上に縊くに當りては、小説の如く入り易からず、先づ其大體に亘りて相當の準備あるを便とす。殊に篇中の人物に親みたる上ならては、充分の興味は得難かるべし。初めて本篇を縊かるゝものは、本文に入るに先立ちて、此梗概を一讀せられんことを希望す。一旦讀破せられたるものにて、之に由りて、その記憶を新たにせんは、敢て無用の業にもあらざるべし。梗概は少しくラムの沙翁物語を參考せり。

金貨の猶太人

シャイロック

爰に以太利國ヴェニス市在住の猶太人にシャイロックと呼べるものあり。金貨を本業とし、市内の商人どもに高利の金子を貸して、鉅萬の富を作りぬ。元來頑冥無情の老骨にて、貸したる金子を取り立つるに些の容赦とてなれば、多くの良民より蛇蝎視せられ、就中同市の貿易商アントニオの憎む所となりぬ。シャイロックも亦アントニオ

に對して痛烈なる惡感情を抱きけるが、其惡感情の因てきざせる理由の一は、アントニオが窮乏の人民に對し、無利息にて金錢を貸與することは、なりき。兎に角兩者の反目の程度は、非常にして、アントニオは市場の邊にてシャイロックに邂逅する毎に、必らずその冷酷なる處置を攻撃し、甚だしきは其面に唾するに至れり。シャイロックは陽には反抗せざれど、内心には不平止み難く、偏に復讐の機會を待ち居れり。

貿易商

アントニオ

アントニオは貿易商としては、誠に世間類例なき青年紳士にあり。シャイロックとは正反對に一般士民より大に尊敬せられ、サラリノ、ラニオ、グラチアノ、ロレンソ等の諸人士皆其高風を仰ぎ、その門下に集りぬ。就中アントニオが刎頸の友垣を結べるものを、パッサニオといひ、殆ん

ど同胞も管ならざる觀ありき。パッサニオは名門の出にしてその眉目極

風流才子

パッサニオ

めて清秀なる風流才子なるが、若氣のあまり華美の生活を營みければ、その多くもあらぬ財産は何時しか蕩盡し、少なからぬ負債をさへ作りぬ。されどアントニオは常に其窮乏を救ひ、兩者の間は心も一つ、財布も亦一つなるの觀ありけり。

或る日の事なりき。パッサニオはアントニオに會合し、爰に借財償還の妙計ありとて、包む所なく胸中の秘密を陳べて言ふやう、ベルモントの地に富裕の一貴女あり、まだうらわかき身を以て、父と母とに先立たれ、廣き世界に、一と本の清き姿の百合の花、香すぐれしその上に、尙ほすぐれしは、其心ばへいつぞや小生訪問の折、ちらと賜はりし情思の眼光、あゝその後、移香の身にしみくと得忘れぬ。若し今日之を訪問せば、必らずその芳

情に預りて婿がねとなることを得、因て鉅萬の財産を我物となし、年來の借財を償還し得べし。たゞ憾むらくは、かゝる貴女の情人として、打つて出でん準備の金子に事を缺くが故に、重ねくの事なれば、甚だ言ひ悪けれど、願くは金子を借用したしと。

折からアントニオの手に現金とて無かりしが、二ヶ月以内には、莫大の貨物を積みたる所有の船が歸港する筈なれば、何とか工夫もあるべしとて、兩人相前後して、終に高利貸のシャイロックの許に到り、利子は汝の言ふが儘に拂ふべければ、金三千兩を貸せと請求す。之れをさくやシャイロック日頃の怨みむらくとして堪へ難く、ア、若しも彼奴の急所を壓へる

アントニオ金をシャイロックより借用す

ことが出来たなら、年來積もる怨恨をば、など晴さずに、おくべきぞ。畏れ多くも曇りなき我、猶太の民衆に悪意

を挿み場所もあらうに四方の商估の格別繁く雲集ひ来る市場の裡にて、このシャイロックに悪口雑言拙者が日頃營める肝要の職業をば意味暗に貶し汗水垂らして麻けたる貴い金子に、利息の名を附けて嘲弄す。彼奴を容赦しておくやうで、何て猶太人の顔が立つものかと獨語す。アントニオはシャイロックの返事の遅きをもどかしがり、傍より之に迫る。何うぢや、金銭を貸して呉れるか「イヤ、アントニオ様」とシャイロックは答へぬ。拙者が金貸業を營んで居るといふので、貴所様は、人混みのする市場に於て、何回拙者を罵られたか知れますまい。なアアントニオ様、貴所は拙者を捕へて何と言はれた。ヤレ人非人の邪教徒、ヤレ宿無の犬畜生と、言語に絶えたる悪口雑言。そして拙者の上衣に唾液を吐かれた。然るに今となつて、何うやら拙者の助力が惜しげの口吻、餘りといへば胸慾ではあるまいか。拙者は之

に對して何と返答せばよからうかされどアントニオは冷然として答へぬ。「イヤ拙者の仕打には今後とて變りはないぞい。貴公を捕へて犬とも呼ばう。唾液も懸けやう。蹶飛ばしもせう。されば貴公が三千兩を拙者に貸すにしても、朋達に貸す氣では貸さぬが善い。寧ろ仇敵に金子を貸す所思で居られい。シテ萬一約束に背きもせば、些末の遠慮會釋をするには及ばぬ。直に拙者を刑罰に當てられい」「イヤ、さう言はれては話がなりませぬ」とン。シャイロックは、外貌に好意の假面をかぶり、實を申せば、行々は貴所様と和睦をなして、親しくお目をかけて戴き、これまで受けし戮辱を、さらりと水に流したき拙者の本心。今回御用の金子を差上げますに致しても、利息などは一文も頂戴せぬ決心。さアこれより拙者の好意を實地に御目にかけて見せます。何卒拙者と共に公證人がり御同道なされませ、そして證書

が出来た上は、保證人の儀には及びませぬ。貴所様御一人の調印を願ひた
う。ムるところで、一ツ戯れに、若し、しか、く、の、日、し、か、く、の、場、所、に、於、て、證
書面に載せたる、しか、く、の、金額を返濟されぬに於ては、その科料として、
拙者の隨意に、貴所様の身軀の肉正に、一斤を頂戴するなど、假に決めて
置かうては、ムらぬか。

他まで律義なるアントニオは、之をきいて、大に心を動かされ、ジヤイロ
ックが次第に眞人間の域に近づくを喜び、且つは、二ヶ月以内に、我が所有
の貨物の入港すべきを預想し、一も二もなく、右の條件にて、金子三千兩借
用の件を承諾しぬ。バツサニオは心安からず、再三之を中止せしめんとせし
が、終にアントニオの決心を翻さしむるに至らざりき。かくの如くにして
人肉質入れの大訴訟事件は、胚胎しぬ。

富豪の女主
ポルシア

さて、も、變、さ、に、バツサニオが言ひし、ベルモントの一貴女とい
ふは、その名をポルシアと呼び、即ちケイトーの娘にて、ブル

タスの妻と冊きし賢婦人とは同名異人、其才色に於ても、露遜色なき一少
女なるが、ポルシアの亡父は、生前三種の手筈を作り、其中の一個に、ポルシ
アの肖像を入れ、之を抽き當てたる男子に、姫を與へんと遺言せり。筈の上
には、各々題字あり、黄金の筈に題して曰く、「われを選ばむものは、多くの
人が望むものを獲む。」銀の筈に題して曰く、「われを選ばむものは、その
人にふさはしき丈を獲む。」又鉛の筈には、「われを選ばむものは、持てる
すべてをさしげ、すべてを賭せよ」とあり。婿の候補者は、この文句により
て、何れが當り籤なるかを察し、之を選択せざるべからず、之をさくや、われ
こそ首尾克其籤に當らんとて、諸國よりベルモントの地を指して集りく

爾選び
 の抽籤
 する公達の數甚だ多く、チーブルスの殿あり、佛蘭西の貴族あり、そ
 の他英國の男爵、蘇國の君、日耳曼の若殿、モロッコ公子、アラゴン公
 子等一々數へ盡すべくもあらざりしが、是等の中にてたゞ一人も、姫の意
 中の人はなく、姫は振り向きて見んさへも懶く思ひ居りしが、たゞ亡父の
 遺言もだし難きに由り、抽籤を望むものあれば、其志望に任せて之に加入
 せしめぬ。抽籤の前には、寺院に赴きて、引きたる籤の何物なるかを口外せ
 ぬこと、一旦籤に外れるれば、生涯婦人に關係せぬこと等を誓はざるべから
 ず。中にはこの誓詞に畏縮して、抽籤に加入せざるもありしが、モロッコ公子
 アラゴン公子等は進みて籤を抜き、モロッコ公子は黄金の手筥を選びて失
 敗し、アラゴン公子は銀の手筥を選びて之も失敗す。かゝる際に訪問せる
 が即ちかのパッサニオなりき。パッサニオは借りたる三千兩を以て盛に儀容

を飾り、隨員を揃へ、多辨にして賑やかなる俗才子グラチアノも亦隨員の
 一人たり。ボルシア一見してパッサニオと相愛し、而してボルシアの侍女チ
 パッサニ
 リサはグラチアノと相愛す。然れども亡父の遺言は自由の結
 オの抽籤
 婚を許さざるを以て、ある日形の如く抽籤を行ふ。パッサニオ三
 種の手筥の題辭に對して沈吟の後、外觀の決して信賴すべきにあらざる
 を思ひ、思ひ切つて鉛の手筥を開くに、内部には果してボルシアの肖像あ
 り。佳人才子が歡天喜地の情知るべき也。やがてボルシアは一個の指輪を
 取りてパッサニオに與へ、何事ありともこの指輪を失ひ玉ふなと言へば、喜
 悦の念に充ちたるパッサニオの何にかは躊躇すべき。生命のあら
 指輪
 ん限りは決してこの指輪を失はじと固く誓ひぬ。是等の間グラ
 チアノとチリサとは、傍觀してありしが、元來物に臆せず、面皮の一方なら

クラチアノ及び

テリサの結婚

ず厚きグラチアノの何とて黙してあるべき。進む出て、吾にも同時に結婚を許せと迫る。それは賛成致すが、と、バツサニオは聊か意外に驚き、たゞその前に女房を一人見立てる必要がある。言はれてグラチアノは、直に侍女テリサとの關係を説き、テリサも稍々口籠りながら、承諾の旨を答ふれば、バツサニオ夫妻にも固より異議はなく、爰に於て一時に二た組の夫婦の約束は成立し、一座はさながら春風春水一時に至るの趣を呈しぬ。

俄然この歡樂はアントニオよりの使者ソラニオの來着に由りて打破せられぬ。バツサニオはソラニオより一通の書状を受取りて讀みもて行きしが、見る／＼其面色は土の如くなりぬ。ボルシアは側より見て其只事にあらざるべきを思ひ、その理由を問ふ。イヤ、ボルシアとバツサニオは長太息

つきて答ふるやう、卿にまで多大い苦勞をかけて相濟まぬ實はこの書状

アントニオの

不幸の消息

の中には、世にも面白からぬ文字が載せてある。過日余は思ひの丈を初めて卿に開陳せし折、一切の事情を有りのまゝに自白し、身には一錢の財産もなく、裸一貫の紳士だと言ひました。が、今日より見れば甚だしき掛値實は裸一貫以下と言ふべきでムつた。

これよりバツサニオはアントニオの周旋にて猶太人シヤイロックより金子三千兩を借り受けたる事、若し三ヶ月以内に該金額を返濟せざるに於てはアントニオの身體の肉正に一斤を渡すべしと契約せる事、然るに其三ヶ月の期限をあだに過ぎて、アントニオは今や獄裡の人となれる事等、言葉せはしく説明すれば、使者のソラニオ、又故ありてソラニオと途中より同行し來れるシヤイロックの娘デジカ等は、シヤイロックが是非ともア

ントニオの肉一斤を截り取らんとして、何人の忠告にも従はざる事情を
 詳述す。之を聞くや、ボルシア姫の凜平たる精神は、その纖弱の細驅の内よ
 り迸り出て、是非ともわが良人の恩人をば救ひ出さんとの決心と、之に對
 する前後策とは瞬間にその方寸の裡に湧き出てぬ。姫は屹然として、
 ニオを勵ましつゝ、三千兩の金額を二倍にして、六千兩拂ふた上に證文を
 取揚げなされませ。更にその六千兩を二倍、三倍にしても苦しうはムりま
 せぬ。それ程、大事の親友が、
 バッサニオの爲めに、頭髪一筋損はれたと言はれ
 てもなりませぬ。それにつけては、これより直に寺院に赴き、公然に妾をば
 郎君の妻となされませ。シテ婚禮の儀式さへ濟まば即刻ウエニスなる、その
 親友が訪問せらるゝが善い。身不束ながら心に疚しき所ある良人に、新
 枕はかほさせませぬ。——かくて、この二組の新夫婦は、これより直に婚禮

の式を挙げしが、式の濟むや、
 バッサニオはグラチアノを伴ひ、晝夜兼行して
 ウエニスに赴きぬ。されど、
 バッサニオのウエニス行は殆んど無効なりき。何と
 なれば、
 シヤイロックはその提出せる金子には振り向きもせず、偏に契約の
 如く、
 アントニオの肉一斤を取らんことを主張したれば也。

ロレンゾとアエ

シカの驅落

夕の事にあらずして、由て來る所遠き由は既に述べたるが、
 シヤイロックが今回殘忍にも、
 アントニオの肉を割取せんとするに至れる
 近因あり。そは其獨り娘の、
 デシカの驅落事件なりき。デシカは氣の輕き美
 人にして、其下男の道化者、
 ランセロットの口吻をかりて言へば、異教徒なが
 らも稀れなる美人、
 猶太人とはいへど上品の素質なりき。兼ねて耶蘇教徒
 にして、
 アントニオの友なる、
 ロレンゾと相愛し居たるが、
 ベルモントに出

發の前夜催したるバツサニオの宴席に、父シャイロックが招待せられし不在を利用し、金銀財寶を夥多身につけて情人と驅落をなしぬたゞ一人の娘を日頃敵視せる耶蘇教徒に奪はれたるシャイロックの煩悶と失望とは知るべきのみ。されど一層その憤怒の種となりしは、その高價の珠玉と多額の金銀を持ち逃げせられし一事にして、渠は殆んど發狂せんばかりに呼號亂舞しぬ。さなきだに陰險なるシャイロックは、今や全く山狗の如くなりぬ。手に觸るゝものは何物なるを問はずして、之に噛みつかんとす。かゝる際にアントニオが期限を誤りたることなれば、猛然として其肉を截り取りらんとは決心せる也。シャイロックがかく夜叉の如くに荒れまはりつゝありしに反し、ロレンゾ、ジェシカの兩人は飛ぶ鳥の如くに極めて呑氣なりき。手に手を取りて道行と洒落のめし、おのれ達二人の外には、世界に何物あ

るを知らず、彼地此地と遍歴しけるが途中バツサニオの許に向はんとする使者ソラニオに邂逅し、終に之に伴はれてベルモントなるホルシア邸に赴きつ。固より何所に行かねばならぬといふ用事ある身にもあらねば、そのまゝホルシア邸に客分の身となりて、不相變樂しき戀の夢に耽り居たりき。その間にヴェニスにては、人肉質入裁判の世にも畏ろしき當日が到着せり。

人肉質入
裁判

開廷の時刻迫るや、ヴェニス公爵は諸貴族を従ひて臨席しつ。原告シャイロック、被告アントニオを初め、バツサニオ、グラチアノ等

又皆來りて席に連なれり。さて今日の判事として、最初公爵より指定されしは、ベラリオ博士と呼べる老法律大家なりしが、疾病の故を以て、一人の代理の判事を送り越しぬ。やがて其判事の入り來るを見れば、思ひの外に

乳臭の氣ある美少年にして、同じく年少の一書記生を随ひぬ。この年少判事こそ男裝せるボルシア姫にして、その書記生は即ちかの腰元テリサなり。いかにしてボルシアがかく判事として來れるか、又法廷に於ていかなる決判を下したるか、又いかにしてシャイロックの毒計を破り、九死の中よりアントニオを救ひ出せるか、又この際に於けるシャイロックの得意と絶望との言動は如何、高潔なるアントニオの態度は如何、饒舌なるグラチアノの摸様は如何。——是等は沙翁が空前絶後の大手腕を、殘る限なく發揮したる所にして、單に机上に讀む丈にても、讀者は神飛び魂馳せて、滿身の血汐の湧躍するを禁ずる能はざるものあるべし。こは到底梗概にて盡すべくもあらず、又強いて説かば却つて感興を殺ぎ、天機をもらすの虞あり。讀者は第四幕第一場を繕きて、徐るに之を玩味すべき也。

結末

兎に角この裁判に由り、シャイロックの奸計は見事に根底より打破せられて、アントニオは晴天白日の身となり、又シャイロックはその悪計が却つて我身の仇となり、その莫大の財産をロレンゾ夫妻に譲與すべしとの契約をなさしめられ、萬事皆圓滿に落着しぬ。この劇の絶頂は既に過ぎぬ、されど作者の老熟の筆は、先きの結納の指輪を履ひ來りて、之を材料に、興味津津たる最後の一波瀾を描き出でぬ。第五幕は第四幕の急忙熱烈なるとは正反對に、月を描き、音楽を配して、飽までも靜穩和諧、アントニオを初め、ボルシア夫妻、テリサ夫妻、テシカ夫妻等をして、ベルモントなるボルシア邸前に會合せしめ、一問一答の間、詩趣横溢、和氣霽々、人の心に圓滿純良なる印象を與へつゝ、悠々として筆を收むる所、眞に喜劇の大團圓として、一點の間然する所なし。讀者は既にこの篇の大綱に通じ、又

篇中の人物に親みたるべければ、余は爰に梗概の筆を擱き、これより人物の性格につき一言せんとす。

(二) 人物の性格

「ヴェニス商人中最も活躍飛動する二人物あり。一はボルシアにして他はシャイロック是也。此二人物は多種多様な此一篇の物語の中に巧みに組み合はされ、美と醜と、白と黒と、善と悪と相對映して、遺憾なくその得色を發揮せり。

ボルシア

ボルシアは凡てが最も圓滿に具足せる婦人にして、八面玲瓏シエリスベニアのその弱點と見るべきものなし。チェームソン夫人シエリスベニアの著沙翁の女性ヒロイン中に詳説して残す所なし。ボルシアは沙翁が他の女性の多くに附與

したる美質を悉く具備し、品位、愛嬌、愛情等皆備はれり。されどボルシアは是等の外に別にボルシア特有の美質を具へたり。即ちその卓越せる能力、その熱誠なる氣象、その堅固なる決斷力、その躍如たる精神等是也。是等はボルシアに在りては先天的性質也。尚ほその境遇より作られたる幾多外面的特質あり。彼女は高貴の地位に生れ、大の財産を有し、無数の婢僕を使役し、贅澤三昧に日を送れり。故に威儀自から備はり、その爲す所言ふ所皆勿躰あり、品位あり、日頃缺乏の何物なるかを知らず、悲哀失望の如何を味はざるが故に、その智慮には憂鬱の蔭なく、その愛情は常に希望、信仰、歡樂と相提携し、而してその機才には、毫も辛辣の趣なしと説ける何人も首肯する所なるべし。

ボルシアの美質は到る所に發露す。されど最も充分にその特色のあら

はれたるは第四幕法廷の場也。その赫々たる才力、その高尚優雅なる思想、その公平なる判断、その春雨の如き慈悲博愛の情思等、例へば闇にかゞやく星辰の如きありげに、ホルシアの如き婦女は、現實の世界に於ても、又空想の世界に於ても、確かに無類也。バツサニオの配としては甚だ勿躰なき観あり。

ホルシアを光明の寵兒とすれば、シャイロックは暗黒の子孫也。彼は篇中の悪まれものにして、又充分悪まれる丈の價值を有す。友愛の假面の下に、アントニオの生命を奪はんとし、その獨り娘に對して、やさしさ言葉一つだにかけず、娘よりは却て金錢を重視し、又樂しかるべき家庭を地獄の如く不愉快に住みなし、下男にまでも愛憎をつかさるゝ等、到底渠は眞人間にはあらざる也。されど、シャイロックとても生れながらの

悪黨にはあらず、一半はその境遇が、渠が如き冷酷無道の人物を作りあげたる也。渠は猶太人也。西洋の猶太人は我邦の穢多よりも憐れむべし。殊に中世時代に於て然りき。彼等はさながら蛇蝎の如く排斥せられぬ。何人か人間の仲間外れとせられて、怨恨の念を抱かざらんや。況んやアントニオがシャイロックに對する處置は、とりわけ亂暴にして、常規を脱せるをや。吾人はシャイロックの罪を憎めど、その自信力と、その一種の勇氣とに對しては同情を惜む能はざる也。ヘールズ博士曰く、シャイロックは、數世紀に亘れる壓制と、戮辱とによりて、毒氣を吹き込まれたる猶太人の氣象を、繼續し更にその身に襲來せる幾多の苦き經驗は、この毒氣をして一屢増大せしめぬ。鐵鎖は肉を腐蝕せしめ、戮辱は心を腐蝕せしむ。沙翁はこのシャイロックなる人物が眞に悪むべく厭ふべきを感じたると同時に、如何なる徑路を

迫りて、かれが、かゝる悪人となりしかを、攻究するを、忘れざりき。かくてその悪を描くと同時に、又その非凡の腦力と氣力とを描けり。と蓋しこの人物を窺ふに最も穩當の見解なるべし。

アント

ニオ

シャイロックの、不人望とは、正反對に、何人にも人望を有するは、アントニオは、是也。其親友、バッサニオが心を傾けて、兄事するは、言はずもあれ。ツラニオ、ロレンゾ等皆口を極めて之を稱揚し、かの多辯なるグラチアノといへども、アントニオに對してのみは、日頃の亂暴なる態度を一變し、親切と忠實とを旨とするの風あり。地位高きヅニス公爵もこの人の爲めには辯護の勞を取り、心なき獄丁もこの人の爲めには特別の恩典を辭せざりき。渠は實に各階級の人士より畏敬尊信の中心たり。こは、又無理ならぬ次第なり。何となれば、渠は、シャイロックを除けば、他の何人に對して

も徹頭徹尾懇切を旨とし、人の爲めに最大の考慮と周旋とを辭せざれば也。而してかの畏るべき裁判の當日、自若として死を待ち、些の怨言をも吐かざるが如き、確かにその氣品の高潔にして、凡庸の商人にあらざるを思はしむ。たゞシャイロックに對しては、今少し其處置の寛容ならんを望ましむるものあるも、こはこの偏狹なる時世の罪なることを忘るべからず。當時の歐洲の人士が、異教徒に對する憎惡の念慮は、一般に今日の人士の想像の外に在り。又當時は金貸なる職業を最も排斥したる時代なりし也。アントニオに在りて、缺點と見るべきは、其受動的なる事是也。渠は陰氣也。遠慮勝ち也。バッサニオをして自己の危殆なる内情を知らしめざらんとして、終に救助すべき機會の過ぐるまで沈黙を守れるが如き、遠慮もその程度を通り越せり。渠若し肉を割取されて死亡することもあらば、後に至

りて之を知る親友の苦惱悔恨はいかにぞやされどかゝる人物が中心となりてこそサエニスの商人の一篇は成立せるなれ渠の如き友愛の念あつき人が居りて肉を抵當に人の爲めに金子を借り又渠の如き引込み思案の人物ありて期限の盡くるまで口外せざりしにあらずんばこの物語は根底より瓦解し去る也即ちこの物語の起る原因は一にアントニオの一身にかゝれりこれアントニオが本篇の主人公にあらざるにも係らず尙ほサエニスの商人なる標題を冠する所以なるべし猶ほシーザーの篇に於てその實際の主人公がシーザーにあらねどその悲劇の起るべき根本がシーザーに在るを以てシーザーを以て標題となせるに似たらんか

バツサ

バツサニオは最初に在りては單に顔の造作の奇麗なる色男とし

ニオ

か思はれず大負債を作りて毎々アントニオの懐を痛め乍ら尙

ほもアントニオより借金せんとして婉曲の文句を聯ね而して借財償還の妙計は富家の一女子と結婚するに在りと臆面もなく公言すや、興がさめざるを得ずたゞ何所となく氣品の高きが取得なるべしされどベルモントなるポルシア邸に赴きてよりは天女の如きポルシアの光に浴したる結果にやその言動専ら高尚優雅となりて口に眞の愛情を語り讀者をして渠が最初の目的の頗る下劣なりしを忘れしめバツサニオ自身といへども後には全く之を忘却し去りたるの趣なり若し渠にして悪友にくみし陋劣の魔女に交はりたらば果ては手のつけられぬ道樂者ともなりけむこの事なかりしは渠も亦世界第一の果報者といふべし

クラチ

クラチアノは世間にあり觸れたる俗才子也何人も之に對して尊敬の念を拂ふ能はねどさりとて何人もその存在を重寶とせ

アノ

ぬはなし。かゝる人物の浮世に持てる役目は、愉快に賑やかに、時には少しく出過ぎる位にして、他人の興を助くるに在り。かゝる人物が居て呉れねば、いかなる集會の席も寂寥を感じざる能はざるべし。グラチアノは、此種の人物中の傑物也。その毒にならぬ饒舌はいかなる場合にも泉と湧きて盡くることなし。腰元チリサの御亭主としては誠に似合つた男なるべし。グラチアノ、チリサなくも、此一篇は、勿論成立すされど、かくては、一篇の寂びしきこといかにぞや。

サエシカと

ボルシア夫妻の眞面目なる愛情に對しては、サエシカ、ロレンツ

ロレンツ

の小説的戀物語あり。二人は篇中主要の人物にあらねば、その性格の描寫は、他に比して頗る簡略なるを免れねど、さりとして片言隻語の間に、その面目を伺ひ得ざるにあらず。サエシカにつきて吾人が催す觀念の

重もなるものは、その美人なること、その性格の頗る剽輕にして物に頓着せざるの風あること是也。サエシカは責任とか義務とかいふ觀念の極めて薄き少女にして、父の家を逃亡するにありても、平然として、さて、これから手筈の上に齟齬がなくば、今が親子の生別娘は父、父は娘を失ふ譯など、氣樂なことを言ふ。彼女は父、サエシカとは殆んど正反對の性質なれど、さりとして一種の猶太人的特質がなきにあらず。その驅落に當り、空恍けて父を欺けるが如き是也。彼女の頭は又一種東洋的空想に充ち、月に對し音樂に對して、詩思に耽るを見る。この點が詩的なるロレンツと意氣投合せの源因なるべし。ロレンツはサエシカに比すれば、やゝ深みのある若者也。詩思空想他まで強く、世事には頗るうとき人物なるに似たり。猶太人の少女を理想化して愛し、持ち逃げしたる金銀財寶を濫費して省みざるが如き、

以てその人となりを見るべし。

ランセ 道化者のランセロットは一種下等なるグラチアノ也。坐輿を助け

ハッパ 爲めの人間としては無用なるにもあらねど、勿論碌な事の出
来るにあらず。その長所は下らぬ駄洒落と、無用の贅辯と、頓珍漢の學者語
を濫用して、人の玩弄物となるに在り。ロレンゾの素破抜くところに由れ
ば、黒坊の女を孕ませたる由、渠に在りては大出来のつもりなるべし。され
ど讀者はこの男のお蔭にて、シャイロックの家庭の内部を知ることを得、又
ロレンゾ、ヂュシカはこの男を媒介として、驅落を就けたり。渠も決して、大食
して、朝寝坊をするだけが能の素餐者にはあらざりき。

(三) この物語の出所

沙翁は、他人の使用したる趣向若くは材料を使用することにつき常に
無頓着にして、有り觸れたる物語を自由自在に驅使し、わが藥籠中のもの
とせり。ヴェニスの商人も固よりその例にもれざりき。この篇の主要なる事
件は二個の物語より構成せらる。即ち、人肉質入の物語と、手筈拙蕪の物語
是也。共にその出所の甚だ舊るき物語にして、沙翁以前に既に舞臺にかけ
られたる事さへありしに似たり。

人肉質入の物語の直接の原本は、以太利に在り、ギョヴァンニ
の物語、フイオレンチノのものせる、イルベコロンと題せる物語集是

也。こは一三七八年の編纂にかゝりしが、一五五八年に至りて初めて出版
せられたり。かくて英國に入り、英語に翻譯せられしもの、如きも其譯本
は今日に傳はらず。兎に角此作と、ヴェニスの商人の間には明かに類似の點

を有す。此物語に於ても重なる舞臺は全じくヴェニスに在り。商人アンサ
 ルド(アントニオに相當す)はこの市の住人也。猶太人の金貸より金子借用
 の條件及びその目的等大體に於て兩者同一也。而してポルシアに相當す
 る一貴女がベルモントに住めるの一事は、就中動かし難き類似の點なり。
 やがて此貴女が判事としてアンサルドを救助する事、又裁判が済みたる
 後、良人の指輪を請求する事等も相似たり。最後にその侍女がアンサルド
 に嫁するは稍々異なれど、侍女の結婚といふ丈は同一なり。

手筈選擇

の物語

中世に行はれたる羅典語の物語集に「ゲスタ・ロマノルム」と稱
 する有名書あり。東西兩洋の傳説、奇譚、神話等を蒐集せるも
 の也。ロビンソンと稱する人に由りて英譯せられたるが最もエリザ朝に
 流行せり。沙翁が「手筈選擇」の物語の出所は、即ちこの書也。之に由れば、羅馬

の一王、我王子の妃となすべき婦人の性質を試みんとして、三種の手筈を
 選ばしめたりとあり。同じく金、銀、鉛の三種にして、金の手筈には、われを選
 ばむものは、其人にふさはしき程を獲む。銀の手筈には、われを選ばむもの
 は、その性情の欲するものを獲む。鉛の手筈には、われを選ばむものは神が
 其人に附與せる所を獲むとあり。この題句の殆んど「ヴェニスに就きて」と同一
 なるが、原本として争ひ難き點なるべし。

以上二個の物語が「ヴェニスに就きて」の商人の最も有力なる原本也。されど「ヴェニス
 に就きて」の發刊以前に、此兩種の物語を合併したる脚本が既に世に存在し
 たるものゝ如し。こはステーション・ゴットンなる人が、一五七九年に書き残せ
 る脚本攻撃論中にあらはれたる數句を根據として下したる推定にして、
 固より明確なる事實にはあらず。又古るきバラッド體に、甚だしく「ヴェニスに就きて」

商人に似たる作あり、兩者の間に關係あるは疑ふべくもあらねど、このパ
ラドの年代の全く不明なるが爲めに、何れを出所とすべきかにつきては
確説なし。たゞ此パラドを以て、ヴェニスの商人以前に出でたりとなす説が
やゝ有力なるものゝ如し。

他にも局部の出所として擧げられたる作はあれど、爰には略す。たゞマ
ローの「モルタの猶太人」(一五九〇年出版)に就きては一言せざるべからず。
マローが脚本作者として沙翁の先輩なるは人の知る所にして、沙翁をの
ぞけば、當時第一の大作者也。その描ける猶太人、バラバスは、怪物に近くし
て、シャイロックとは同一視し難きも、兎に角その強慾にして、排耶蘇教的な
るは兩者相似たり。又バラバスの娘が耶蘇教徒を愛する事も大に、ロレン
ゾ、ヂェシカの關係に似たり。沙翁が多少之に負ふ所ありしは疑ふべからざ

る也。

されど是等の出所といふべき數々の物語を見れば、見るほど、今更顯著
なるは沙翁の非凡なる天才也。ヴェニスの商人の材料は最も陳腐也。たゞ
この陳腐なる材料を活用せる沙翁の力量は實に古今獨歩也。諸種の離れ
々の物語を集めて、之を大成し、融合し、各自の間に、切つても切れぬ、一大
脈絡を作らしめ、而してシャイロック、ポルシアを始め、幾多生氣躍々たる人
物を配置し、詩味あり、變化あり、興趣あり、世にも愉快なる別乾坤を舞臺の
上に描き出せり。是等は獨り沙翁の作に求むべくして、所謂出所と稱する
所の物語中には求むべからざる也。

(四) 刊行の年月

「ヴェニスの商人」は一五九八年七月二十二日初めて書籍組合の帳簿に登録せられたるが、その下の但書に、チャムブレン卿の許可なくんば出版を禁ずる旨を附記してあり。チャムブレン卿とは、沙翁が加はれる一座の俳優の保護者也。この但書の爲めにや、本書の出版はやゝ遅延せしも、一六〇〇年に至りて二種のクォート版世に出でたり。一方はロベルツなるもの、印刷にかゝり、通常第一クォート版として最も重視せらるゝもの也。第一クォート版 他はヘースなるもの、印刷にかゝり、之を第二クォート版といふ。一六三七年には第三クォート版あらはれ、一六五二年に至り、更に第四版あらはれぬ。以てこの脚本の大に世に行はれしを知るべし。されど是等の刊本は、單に第二クォート版の再刊に過ぎずして、刊本としての價値は少なし。第一フョリア版は一六二三年に出でしが、これ又

その他の
附版

第二クォート版と大同小異にして、單に些末の點に於て異なるのみ。之を要するに「ヴェニスの商人」の本文には大なる困難なし。その根底はロベルツの第一クォート版にして、之に第二クォート版、及び第一フョリオ版を参考せる也。

(五) 脱稿の年月

脱稿の年月に就きては議論まち／＼也。本書が、一五九八年七月書籍組合の登録簿に記入せられ、又同年發行の某書中にも載録されたれば、遅くも一五九八年七月以前に脱稿せる文は明白也。然れども明白なる點はたゞこれのみ。或る一派の人士は、此書の脱稿を一五九四年とす。これヘンスロイなる芝居管理人の日記に、一五九四年八月二十五日の日附にて「ヴェニスの喜劇」なる一作を擧げたるに基く。謂らくこの「ヴェニスの喜劇」こそ即ち

一五九四年説

「ヴェニスに就きて」の商人なれど、然れども、その證據は餘りに茫漠たるが上に、作風より見るも少しく早きに失するが如し。多數の沙翁學者は、脱稿の年月を、一五九六年と推定す。この説蓋し最も穩當なる

一五九六年説及びその理由

が如し。その理由に曰く、(一)第四幕法廷の初部に見えたる
シヤイロックの言辭中には、シルツェインの「オラトル」英譯中に類似の個所多し。この英譯は一五九六年の出版にかゝれり。(二)ヴェニスの商人の最後の幕の首部は、明かに「ウィリー、ピガイルド」と題せる戯曲に學ぶ所あり。この作の出版は明白ならねど、九六年より九七年にかけて出版せられしもの、如し。(三)シヤイロックの如く、法廷にてナイフを磨く事は羅典劇「マキアヴェラス」中に在り。この劇は一五九七年、劔橋大學にて演ぜられたる事あり。

是等の證據は皆不確實の痕をとどめ、最後の斷案を下すには足らねど、何れも九六年より九七年の邊を指すは同一也。尙ほ作の大體の性質より推測するも、九六年頃といふが穩當なるに似たり。ダウデン氏曰く、一五九六年は吾人が指定し得る年代中の最も穩當なるもの也。その他の諸家にありても此説を採るもの最も多し。

他に一説を立つるものあり曰く、ヴェニスに就きての商人は先づ一五九四年頃に草せられ、その後改作せられしならんと、されど圓滿にして斧鑿の痕をとゞめざる此作品より推せば、こもさまで有力なる説とは言ひ難かるべし。

明治三十九年一月

譯者識

第一幕

第一場 ヴェニス市 街頭

アントニオ(ヴェニス市の)
サラリノ(アントニオの友)
ソラニオ(全登場)

ニオント この日頃結ばれがちのわが心、その理由は己も知らぬ。これには己も呆れはて、又卿達も呆れるとや。さるにても怪しきはこの氣鬱症、いかなれば之に感染り、いかにして之を身に受け、又いかなる料から之が造られ、いかなる物から之が生れしか、それ等のこと一として、肝腎の己にも知れはせぬ。ホニにうとましきはわが身の昨今、積もる憂愁に心がくもり、吾とわが身の判別がつかぬ。

リサラ ハテ貴所のお精神は八重の汐路の浪のまに／＼揉まれて居るの

ぢや。海の上は貴所の船舶が數をつくして往來する場所ぢやもの。イヤ見あげるやうな貴所の親船が業山な帆を張つて、大海原の御大名但しは金満家の長者らしく構へ、又波に浮べる山車もかくやと思はるゝ姿して、他の小形の船舶を眼下に瞰下す威勢は又格別、他の船どもは畏れ入つて叩頭をしたり、腰をかゝめたり、尻に帆かけて、そこそこ逃げて行きますぞい。

ニソラ
ニオラ
げに拙者などが、若しも貴所のやうに鉅萬の財寶を賭けて、貿易を營むのであつたなら、氣も魂も身に添はず、海上の船貨にばかり、ひたすら心を奪はれて居る筈。シテ且暮草の葉を引き抜いて、その葉にあたる風の方角を考へ、又地圖と首引して、港灣の所在をさがし、波止場や船の緊留場を尋ね、早い話が、船貨に取りて、よもやの危険がありさ

うな、事々物々に胸を惱まされ、是非ともこりや氣鬱症に罹らずには居られぬ筈。

リサッ
拙者とても御全様、皿に盛りたる羹を、ふつと一と息吹くにつけても、海上の風伯の慘害を想ひ出せば、瞬間にぞつとして、瘡を惱らふに相違ない。砂時計の運動を見ても、この砂より淺瀬遠洲の類を想ひやり、財寶を山と積める所有の船が、砂の裡に擱坐して、檣樓の邊が船底の下位に沈み、四邊の土砂を嘗めて居る状況を想ひやり、取越苦勞をするは受合。それから又寺院に詣て、石疊みの拜殿を見る――それが又心痛の種、石から直に想ひ起すは、險呑なあの暗礁、若し船がいさゝかも、之に觸るゝが最後、積める香料は、はらりと波間に四散、勿躰なくも、逆まく怒濤を綾の錦におし包み、今までしかくゝの價格の

品物が、次ぎの瞬間には消えてあとなき水の泡——かゝる事どもを逐一^{ついで}想ひやれる身が、何として、かゝる災難の若しも起つた曉の、不愉快を想ひやらずに居るものぞ。イヤ兎角の理由は聞くには及ばぬ。受合つてアントニオ氏は船の積荷の事に氣を揉んで、それで氣分が塞いで居るのぢや。

トアン イヤ左様の儀が何であるものぞ。一切の荷物を一^{いっせ}隻の船に積んである譯ではなく、又所有の船舶の全体を、全^{みな}一地方に向けもせぬ。又拙者の財産の全部が今年一年の運の向き方一ツにて、左右さるゝ程てもムらぬ。されば船の積荷の爲めに氣分が塞ぐ筈は、些^{いさ}末もないので。

リサラ スリヤ貴所は戀愛病をしてゐるな。

トアン 何んの埒もない！

リサラ 戀の爲めでもない、と仰せらるゝか。それなら何とも致方がありません。愉快でないゆゑ、それで不愉快——とでも言ふておくか。この理窟から割り出せば、不愉快でない折は、飛んで、跳ねて、笑つて、あゝ愉快ぢやと、怒號^{いかげ}くのも六ヶ敷ことはなき筈。それは兎に角、世の中には古來さまざまの人間の變物^{かばいもの}が居ります。或者は年が年中薄目の命^{いのち}、飴屋の笛をさいてさへ、笑ひ興ずる有様はさながら、鸚鵡。或者は又苦し^{くるしみ}、佛頂面^{ぶつどうめん}して、苦蟲^{くるむし}の旗頭^{はたかぶ}、テストルさへ噴飯^{ふんぱん}さうな滑稽にも、莞爾^{わんじ}ともせぬのがある。(テストルは名)

マッサニオ(アゴルトシニアの親友に) ロレンソ(前者の友に) 及びクラチアノ(前者の友に) 登場

ニソラ ホウそれに見えたは御親戚のバッサニオ様、それにグラチアノと

ロレンゾとの随行——イヤ拙者はこれにてお暇と致さう。話相手として拙者などは段違の、一騎當千の面々に、貴所の身をば、お委任申す。

リサラ 實は拙者も是非貴殿の笑顔を拜むまで、暗とまる覺悟ぢやツたが、かく立派な歴々が心配して居らるゝ上は、最うそれにも及ぶまい。

トアン イヤ拙者が日頃大事に思ふて居る御兩所——察する所、何ぞ用事が出来して、卿達は、これをよき機會に逃げるのぢやナ。

リサラ これは方々、お早うムりまする(これは一行に首ふ)

ニオサ お、御兩所、その中陽氣に遊びたいものぢやが、さて何時に致さうな。近來はえらい御無沙汰勝ちにて甚だ不本意、一ツ舊交を温めやうてはムらぬか。

リサラ 何れその中、われ々二人の閑暇な時を練合はせて、ゆつくりお相手を致しませう。

とサラリ、ソラニ兩人退場

ンロレ バッサニオ様、かくアントニオ氏の所在が知れたる上は拙者ども兩人も、これにてお暇と致しまする。最も晝餐時にもならば、兼ねて約束の會食の儀をお忘れあるな。

バッサ その儀は承知致した。

アクラチ 時にアントニオ氏には、甚だしくお顔の色が悪るいと見受けるは僻見か。兎角浮世は茶にすべきもの、それを貴所はあまり大事に取りすぎるゆゑ、身軀を害ふ。一物物に大事を取り過ぎるは、却つて失策の基、ホニに貴殿の憔悴方といふものは、そりや餘りにきびしい。

トア、イヤ拙者はさして此浮世を大事には思はぬ。浮世と申すものは詰まり大仕掛に組み立てられし芝居の舞臺、何れの人も皆各自の役割を演じて居る所、さし當り拙者は、愁歎の役を勤めて居るので。

クラ 拙者などは打つてかはつて道化役が所望ぢや、齡も取れ、敏も寄れ、心は他まで若返へり、笑ひ興じ、跳ね返り、苦しげな呻吟の聲を立て、血の氣が失せて居らんよりは、且から晩まで酒浸り、ボカ〜に體內を温めて居るが、何のやうに面白からう。血氣満々たる六尺の男子のくせに、石齋製の老父の如き顔をするもの、氣が知れぬ、身軀ばかり起きて居て、顔は何所までも寢惚け、しきりに痲癩玉を破裂させて、黄痘などいふ、氣のさかぬ疾病にかゝるは、世にも恐かなる痴人の仕業でゐる。就きては一ツ拙者から、アントニオ氏に言ふてさかせる話

柄がゑる。これと申すも貴殿がいとしいからの事、いとしいばかりに、饒舌も致すわけ——つらく世の中を見渡せば、さても奇態な人もあるもの、その顔は事の外不景氣千萬よどめる池の水同様、粕や粘皮にその表面を張りつめられ、一片の生氣といふものもなく、わざと薄黙つて氣取込んで御座らせられる。その肚裏を探つて見れば、ハテサテ笑止、深き智畧のある人と、世の愚物どもに嗤し立てられたさの、さもしい魂膽、拙者こそは、伶俐巧者、わが物言ふ間は、狗も吼ゆること相成らぬと、ぼさき兼ねぬ眷族、拙者が存じて居る人物の中にも、たゞ黙つて居るばかりに、智者よ賢者よと持て嗤されて居るのが見えるが、若しも一と言唇を動かすが、最後、聽いて居るものは、直に其真相を看破りて、悪むといとは知りつゝ、も、痴者奴ツと、罰當りの悪まれ口の、一ツ

もきゝたうなる。この件につきては、今後尙ほ機會を見て説法致すて
 ムらうが、兎に角イヤに生真面目な顔を伺に、雑魚にも劣る愚物ども
 の賞讃を釣らうなどは、聊爾にも思召すな。さアロレンソ御座れ。皆
 々様これにて失禮、この説法の結末をつけるのは、何れ食後の娯樂
 ンロレ さらば皆さま盡餐の折に又お目に懸りまする——イヤ併し、グラ
 チアノ大將の饒舌には降参々々、拙者はたしかに、今言ひし薄黙つた
 似非賢人の一人に成り果せたに相違ない。口を開く機會がいさゝか
 も無いのぢやもの。

クラ 尙ほ二年ばかりも拙者のお隨員をして居たなら、卿の耳は受合つ
 て自分の音聲を聞き取れぬことであらう。

トアン さらば御兩所これにて失禮——何れその中グラチアノの忠告を

納れて、饒舌家の仲間入りをして見やうか。

クラ そは難有し、辱なし黙つて居て善いものは、乾し燥ばした牛の舌に
 千金の價值ある箱入娘のたゞニツ。

とクラ、ロレン 兩人退場。

トアン 何んぢや、あの男の言草は、あれでも洒落のつもりかいな。

マッサ イヤ、グラチアノの文句は、毎々口から出任せの戯語ばかり。これに
 かけては、ヴェニス市内に敵手はムらぬ。先づ満足な言葉は、二斗の稔
 に二粒の小麥が混れる割合、終日それを搜したとて、容易にそれが搜
 し當ることではない。よし又搜し當てたとて、其骨折を償ふほどのも
 のではムらぬ。

トアン イヤ時に卿が日頃執心と聞ける例の姫御前の名は、何といはるゝ

な卿がこの天女の祠に、人知れず參籠の祈願を立てし趣は、兼ねく聞き及んで居るが、今日は、その御本體を白狀すべき約束の日であるぞい。

イヤ、アントニオさま、小生こそは親譲りの財産を、残り少なに費ひすてたる瘦侍、尾羽打ち枯して懐裡さびしく暮して居るは、卿がよく知らるゝ通りでありやる。これといふも、詰まりは己の身代に相應しからぬ贅澤を盡した爲めの應報、誰を怨まんやうもムリませぬ。因て今後は生活の程度を引き締めん覺悟、いかにせば濫費の爲めに作れる大穴を奇麗さツぱりと塞げるかと、そればかりに頭を痛めて居る次第。して卿には年來金子と親切との厚い世話に預つて居るが、今回もこの親切に甘いて、小生が胸の奥なる借財償還の計略をば、逐一

白狀せん所思。

トア、お、ハッサニオ後生であるぞ、早う聽かせてたもれ。若しその計略と申すのが、卿の平生に負かずして、正しき道に協へる事なら、拙者に於いて金子も惜まぬ、骨折も厭はぬ、微力の及ばむ限りの事は、何なりと存分に御役に立てゝ見せる。

ハッサ さう出られては、今更に何に面目も總角や、われ／＼未だ幼稚く、弓矢の遊戯に耽りし頃、射失ひたる一と本の矢を搜し出てん手段としては、それと全じ射程の矢を取り番ひ、全じ方向に切つて放し、よく其行方を注視して置いたものか、くて二本の矢を賭けし爲めに首尾克二筋とも見出した例は、一度二度の事ではない。小生が今かく住時の乳臭き例證を引き出したるを笑はるゝな、これより述ぶる事柄も、い

づれ劣らぬ、たはけ事。思へばこれまで小生が卿の手より借りし金子は、積り積つて頗る巨額して思慮尙ほ足らぬ若者の常借りたる金子は悉く費ひ果て、残るはたゞ空財布なれども卿が之に懲り玉はて全じ方向に、今一と本の矢を射ることを、お聴許になるならば、今回こそ矢の飛び行ける方向を、注視しておくゆゑに、あはよくば二筋とも見出す、運拙くとも後に射たる矢のみは、携へかへり、たゞ最初の矢のみを對して、今まで通りの恩借者……。

トアン コレ、卿と小生とは、日頃別戀の間柄、そのやうな迂遠い謎などを何故かける。小生が卿ゆゑに力限り盡さんは、今更問ふまでもなき儀、それを兎や角疑はるゝは、いかにも水臭いと申すもの、わが財産の全部を浪費はるゝよりも不足に思ふぞ。それよりは卿の推量にて、小

生の力量に及びさうに思はるゝ事を、遠慮なう、爲いと仰せられい。拙者は何時にても苦しうない。さア早う言ふてくれよ。

さらば申し上げますが、目指すところはベルモントなる富裕の一貴女。まだうらわかき身を以て、父と母とに先立たれ、廣い浮世にと本の清き姿の百合の花、色香すぐれしその上に、尙ほすぐれしはその心ばへ、いつぞや小生訪問の折、ちらと賜はりし情思の眼光、あゝその後移香の身にしみ、くと得忘れぬ。姫の御名はポルシアとて、往古羅馬の名士ケートの娘にて、ブルタスの妻と冊かれし、かの賢婦とは同名異人、その才色にかけても、つゆ優劣はなき少女。さればその令名は早くも四海に傳はりて、津々浦々の果よりも、風がもたらす貴公子の、數は十人又百人、姫の額にふりかゝる黄金の髪は、そのむかし、コ

ルチヨスの磯にかゝりし金羊の毛皮かと、勇士デニソンの昔噺も忍ばれまする。(神話にソンの事) 希願つきてはアントニオさま、小生の依頼といふはこの事、若し小生に、是等夥多の貴公子と、對抗する丈の資力さへあるならば、年來の宿志を遂げて、三國一の果報物と、受合つてなれる所存。

トアン ム、實は卿も知らるゝ通り、小生の財産といふは、皆海上に浮べる品、今は生憎現金もなく、又金子に換ふべき商品も有たぬが、これより出掛けて工夫せば、何うがな才覺がつくてあらう。依むところは、ヴェニス市中での拙者の信用、この信用の届かんかぎり、金子を整へて見たならば、ポルシア姫の候補者の一人となり、ベルモントまで打つて出てん軍資に事は缺くまい。さア卿もとく出掛けて、心當りをきいて

くれよ。拙者も直に金子の有る場所に向はう。拙者に對する信用やら、友誼やらの力にて、これしきの金子が整はぬことはよもあるまい。

と兩人退場

第二場 ベルモント ポルシア邸の一室

ポルシア(富家の女主人にて) テリサ(前者の登場)

シポアル これ喃、テリサ、このさゝやかな身一ツが、廣い世界に置き所なく、浮世が厭でくゝならぬわいなア。

サテリ そりやち姫様御無理と申すもの、幸福なことばかり續きませいで同じ程に不幸なことの續くなら、浮世が厭もさこえまするが、何の月圓満なる和女の御身の上——尤も見渡すところ世の中は、有り剩る

のもなか／＼難有くはない様子。日頃山海の珍味に飽くものは空腹をかへて、饑飢に泣くものと、何方も痛いものとやら。さすれば、この世にて、中庸の生活を送るのは、餘程も目度きわけ。つゞまるところ、飽食暖衣は却つて年波の早う寄る基、過不足のなき生活が、無病長生の源とやら申します。

ボル ち、神妙な物の言ひぶり、其方も中々隅には置けぬわいな。

テリ 言葉通りに、これが一々、行ひ得るものならば、格別結構にムりまするが。

ボル それが何より六ヶ敷ものなのぢやわいなア。若し心によしと思ふ事が、さながら實地に行はるゝものならば、草の庵は大伽藍、賤の藁屋は、やんごとなき方々の住まはるゝ殿宇ともなるであらうぞ。心によ

しと思ふことを、さながらに行はんは、それは格別優れたる名僧、傾徳ならでは、協はぬ仕業。二十人の群衆をあつめて、説教してきかせるは、易けれど、その二十人の一人となりて、教へられたる件々を、身に行ふは、并一と通りの苦心では、思ひもよらぬ。いかばかり、頭腦を絞りて、心の慾を抑へる爲めの法則を定めんとも、むら／＼と湧く情熱は、事もなげに、その冷かな規憲の端を乗り越す習血氣に燃ゆる若者の、心の駒の一たび狂へば、その勢は、さながら網をくゞる脱兎の姿、小言や忠告の覺束なき足元では、とても手に負へたものではないぞい。それはさうとか、かゝる理窟は、差迫つた身の良人選びの役には、立たぬ。イヤ選ぶといふも、耳ざはりな、好いた殿御を選びもならず、好かぬものをも拒まれぬが、妾の身の上。亡れ玉ひし父君の、仰せ一ツに縛られて、この

儘ならぬ浮世をかこつ身の因果。喃テリサ、生涯連添ふ良人を定めるに、好と不好とを選別する権能を有たぬとは、何と痛い身の上ではあるまいか。

子リ これいなアお姫様、和女の父君は、日頃陰徳を積まれしお方シテ善人の正に死せんとする時は、その心は神の意に通ふとやら。さすれば、金と銀と鉛との三種の手筈を作られて、之に書きつけた文句により、御父君の真意の程を洞察せ、首尾克當てた御方を、姫様の婿君にするといふ、あの運定め、の抽籤法は、受合つてすぐれし御趣工、心から姫様を愛されて居る殿御ならては、その貴い籤に當る筈は、ムりませぬ。さるにても、これまで数々ありましたる貴公子の中にて、和女のお思召は、何誰に御座りまするぞい。

ホル 一人づゝ、その名をいふて見や、其方が名指すにつれて、品評をする程に、篤と言葉の表裏を見て、妾の好不好を推し測るが善し。

子リ さらば、先づ、あのチーブルスの殿様は何と思召めす。

ホル あの方かいな、あれは野馬……。でもその證據には、平生の話柄までも、御自分の馬の風評で持ち切つて居られる。そして御自分の手にて蹄鐵を附着るのを、何よりの技倆として御自慢なさるゝわいな。よも、あの方の母御が、鍛冶工と不義もされまいに。

子リ さらば、あのバラタイン伯爵の君は、

ホル あの方は、毎々、害虫を噛みつぶされたやうなお顔容、拙者が好かぬなら、好かぬでよい、勝手にせいと言ひたげの御人、臆可笑しき物語をさかされても、荒爾ともなさらぬ。お齡が若くてさへかくの通りであ

るなら、若しもあれがお齡を召された晩には、希臘の泣博士とやらんに似もせうぞ。(紀元前六世紀に住める希臘の異名)妾はこの二人とも何れも好かぬ。かゝる方々よりは、人骨を口にせる死神の妻と呼ばれる、が遙かに本望。お、あれを良人などは、思ひ出してもぞつとする。

子リ では、あの佛蘭西の貴族ル・ボンさまにおかせられては。

ホル、さればいなア、あれにても人間の片割かいな。よも木の叉から生れた妖怪變化の類でもあるまい程に……。アレ妾とて、人を嘲ることの罪深く、末畏ろしい位は存じて居る。さればといふて、あの方は又格別チーブルスの殿よりも馬狂又パラタイン伯よりも苦蟲の癖が強い。のぢやものを、器量より言へば半人前癖にかけては千人前、鶉が鳴けば跳りあがつてのけぞり玉ひ、相手がなければ、御自分の影法師と決

闘もなし玉はんず勢若し彼様なお方に連添ふなら、二十人の良人に、冊くほど氣骨が折れやう。後生であるぞい、ル・ボンさま、萬望この妾をば嫌つてたべ、嫌つてくだされば、善いお兒ぢや、夢中になつて好かれ、たとて、そのお相手は出来ぬわいな。

子リ、さらばお姫様、まだお齡のわかい、あの英吉利の男爵、フオクンブリッヂさまは。

ホル、其方も見やる通り、まだ、あの方とは挨拶一つせぬわいな、互の言語が通ぜぬものを。あのお方は、羅典語も、佛蘭西語も、以太利語も、いづれも不得手、又妾がいさゝかも英吉利語を知らぬは、其方も善う知つて、知り抜いて居る筈、外觀から言へば、あの方は優れし美丈夫、とは言へ、案山子との問答には、誰しも窮るぞいのみならず、奇怪に見ゆるは、そ

の服装思ふに、あの胴衣は以太利にて整ひ、あの圓く膨れた股引は佛蘭西、又帽子は日耳曼と、一々異つた土地にて調製ひ、又あの舉動態度は、世界各國の寄物ではあるまいか。

子リ　さらば姫さま、あの方のお隣なる、蘇格蘭の殿は何と思召めす。

ボル　あの方は、隣同志の交際に、義理固いお方であるぞい。英吉利のお方より、ポカリと一ツ横面のお見舞を受けると、このまゝ黙つて頂戴致しては相濟まぬ。何れその中御返禮仕ると、固い誓詞を立てられた。さけば佛蘭西の殿が又、この方の證人となりて、調印の上に、全じく横面の返禮を誓つたとやら。(當時英國は蘇國を壓迫し、佛國は常に蘇國に對し、公認の事、並し俗受けの御手段也。)

子リ　さらばサキソニイ公の御御さまとやら承りまする、あの日耳曼の

若殿はお氣に召されましたか。

ボル　あの方かいな、朝の間は白面で居られるが、それで、事の外部陋らし、いお方、午後には御酒を召されて、その時は並外れて鄙陋らしいお方。御機嫌の殊にすぐれし時が、やゝ人並にとゞきかね、御機嫌の最も悪い時には、鳥や獸にやゝまさる。若しも妾の運拙く、鏡があの方に當りもせば、その曉には、一生の智慧を絞りて、一所に接まぬ工夫を致さうぞう。

子リ　さればと申してお姫様、若しあのお方が抽籤に加入されて、そして肝腎の當籤をお引き遊ばされたなら、いかに藻掻かれたとて、致方がムりますまい。それを不好と仰せられては、それでは御父君の御遺言に背かるゝではムりませぬか。

ホル それ故、さる難題の起らぬ先きの呪禁に其方に一ツ依頼がある。すぐれて醇き葡萄の美酒を、なみく／＼と大きやかな盞に盈たし、それをば空籤入れたる手筈の上に載せてたも、裡には悪魔外には酒の誘引物がある上は、あの方がその筥に手を出さるゝは、必定喃テリサ、かゝる酒樽の宿の妻と成りさがる前には、いかなる手段も仕盡して見るぞい。

子リ まこと申せば、姫様、右に申上げました殿方のことならば、最早御配慮には及びませぬわいな。右の方々は、御父君の工夫遊ばされた手筈の抽籤法には、何れも不承知、何ぞ他の仕方によりて、姫様をお手に入れ遊ばすことの協は、ぬ上は、即刻本國に立ち戻り、この上御邪魔はせぬと、何れもその決心の程をば、妾の許まで、申越されてムりまする。

ホル それは又願ふてもなき僥倖ではある。妾は他まで父君の遺言を守らん覺悟、若し父君の御指圖にいさ／＼かも背くとあらば、よし千歳の末まで生き延びんとて、月の女神が妾にとりて善い龜鑑、ゆめ／＼男性の肌には觸れぬ。さるにても右の殿原が、何れも温なしう、よく事の譯をさ／＼分けて呉れたのは、何より目出度いことではある。一人として、懐かしい、引きとめたいと思はるゝ。お方はないものを。

子リ では、お姫さま、御父君尙ほ御在世の御訪問、れ玉ひしヅニス、の紳士——モントフルラット侯爵のお同伴の中にて、學者とも、武夫とも、一きは目立ちし若殿がムりましたな。まだ、あのお方を、お忘れになりませぬか。

ホル それは忘れぬわいな。あれは、ハッサニオ様……。たしか、さう言ふ御

名の方であつたと記憶おぼえて居るが。

ホニ ホンに左様でまりました。あの御方のみは、この不ふ東な妾の眼にとまつた殿方の中なかにて、麗人あまびとの配つれあひと、呼よばるゝに相あ應こしい、立派な殿御と見みられました。

ボル 妾もあの御方は善よう記憶おぼえて居るが、ホンに其方そなたの言いやる通り、優よれた御方ではあつたのう。

下僕しもべの一人登場

あゝ何事なにごとでありやる。何ぞ用事ようじかや。

下僕 申上まます。只今御四人連の異國いこくの方が御姫おひめさまにお告別いさよなの爲め参上まゐりました。又外またにモロッコ公子こうしとやらよりの先驅せんくの使者しやが見えましてまります。シテその御主人ごしゆじんが今夜こんや爰こゝにお入來いらいとの口上くちじやうにム

ります。

ボル ハテ承知おぼしたわいな。その四人の方々に暇ひまを告げるは嬉うれしけれど、迎むかへる一人ひとりがさて氣懸きけんりな。モロッコ公子こうしといへば、その皮膚かわは闇夜やみよの烏くろ色の黒くろさが思おもひやられる。心こゝろの中なかが善よかれ悪わるしかれ、なつかしい人ひと品なまとも思おもはれぬ。

チリサおじや、(僕に)又其方そなたは一足ひとあし先まきへ。

一人ひとりを拂はらへば、一人ひとりが來きる。ハテ辛氣しんきなことぢやなア。ふり

と一同退場

第三場 ヴェニス市 一旗亭

パッサニオ(前に)シヤイロック(金貸の)登場

シヤイ ロック フム三千兩——シテそれを。

ニオサ バッサ 三ヶ月間借用したい。

シヤイ フム三ヶ月間——シテそれを。

ニオサ バッサ 既に述べた通り、右の金額に對して、アントニオが證書を入れるの
ぢや。

シヤイ フム、アントニオが證書を入れる——シテそれを。

ニオサ バッサ それにて金子を貸すか、貸さぬか、諾否の返答一時も早う聞かせて
欲しい。

シヤイ フム三千兩を三ヶ月——シテ、アントニオが證書を入れる……。

ニオサ バッサ その返事を早く聞かせい。

シヤイ フム夫のアントニオならば、先づ資格の善い人物ぢやテ。

ニオサ バッサ 何ぞアントニオに就きて悪評でも耳に入れられたか。

シヤイ 何………何んで左様のことが拙者が只今資格の善いと申したは
それは充分の有力家ぢやと申上げる所思なので——尤も考へて見
れば、アントニオといふ方の資産といふは、あれは随分浮雲き遺縁の
品ぢやテ。ありとあらゆる財産は皆波の上、一隻の親船は、トリポリス
(亞非)に航海、他の一隻は又西印度に航海中、尙ほ市場にての傳聞によ
れば、墨國にとどまるもあり、英國に向へるもあり、その他外國の港灣
に撤布つて居る所有の商船が數多くある趣が、御覽じませ、船舶
と申すものは、ホンの板子の集合物、船子と申したところが、普通の人間、
陸鼠あれば、水鼠あり、陸盜人あれば、海盜人の、ソレ海賊といふ物騒
な奴が居まするぢや。それから又、浪風岩等の危険もある。こりや容易

に高枕をして眠られはしませぬ。とは言ふて見るもの、あの方は有力家ぢや、フム三千兩——ではアントニオ氏調印の借用證を引受けて見るか。

バツ 引受けて決して心配はムらぬ。

シヤイ 勿論心配のないやうにせねばなりません。さて心配を無くするには、篤と熟考致して見ねばなりません。時にいかゞてムりませうな、アントニオ氏にも目に懸るわけには参りますまいか。

バツ 一所に盡せをしたゝめやうではないか。

シヤイ そして、あの豚肉の臭い奴を嗅ぐのでムるか。救世主が悪魔を追ひ込んだと申す、アノ豚の肉を食ふのでムるか。豚肉は猶太人の禁物、（豚肉は猶太人の禁物、聖迷^て値^し拙^者は貴所方と貨物の賣買は致します。談話もします。散歩



第一幕第三場

「やがてオニオンが来るとバツは
「………は子様の奴彼を見なれあんなに」

もします。その他何なりと仰に従ひますが、たゞ貴所方と飲食を共にするのみは眞平御免を蒙ります。市場の邊にて近頃珍らしい事もムりませぬか。——ヤ何誰か其所に見えた様子。

アントニオ登場

パッサ

これがアントニオ氏ぢや。

シャイ

〔旁白〕 フンあれを見い。彼奴の様子は、權威に阿附る收税吏そのまゝ、我慢にも二た目とは見られぬ。先づ彼奴が耶蘇信者であるのが惜い。それがそれよりも、取りわけ惜きは、日頃無法にも、無利息で金子を貸すことぢや。これが爲めにツエニス在住の吾々金貸業者が命の綱の利息の割合がますます低廉る。ア、若しもたゞ一度彼奴の急所を壓へることが出来たなら、年來積もる怨恨をば、など晴らさずにおくべき

ぞ、畏れ多くも曇りなきわが猶太の民衆に悪意を挿み、場所もあらうに、四方の商估の格別繁く雲集ひ來る市場の裡にて、このシャイロックに悪口雑言、拙者が日頃營める肝要の職業をば、養味憎に貶し、汗水垂らして贏けたる貴い金子に、利息の名を附けて嘲弄す。彼奴を容赦して置くやうで、何で猶太人の顔が立つものか。

パッサ これ、シャイロック、何を致して居るぞ。

シャイ へ、拙者は今手元に揃つた現金の額について、胸算用をして居ましたので、大凡の見當では、即時に三千兩全額耳を揃へて整へることは出来さうにもムリませぬ。——イヤ併し御心配めさるな、拙者と全族にチュバルと申す長者が居りまするが、全人に申込まば、金子は必ず整ひまする。イヤ少々お待ちくだされ、期限は何ヶ月との御注文で

ムりましたな——「アントニオに向ひ」これは、お珍らしう拙者どもに取りて、誠に思ひ懸なき華客さまにムりまするナ。

トアン イヤ、シャイロック、貴公づれとは違ひ、拙者は日頃金銭の貸借に利息の遣り取りは致さぬが、たゞ今回丈は、親友の急用もたし難く、日頃の習慣を破ることに致した。向ひいかゞでムるな、所要の金額の所は、まだ申されませぬか。

シャイ ハイ、三千兩といふ御注文で、受けるか。

トアン シテ返済の期限は三ヶ月。

シャイ おツと悉皆それを忘れて居ました。——三ヶ月、ホンニさう言ふ御注文でムりましたな。一啓すでは、證書をお入れくだされい。さすれば、その……、少々お待ちくだされい。貴所様の只今のお言葉で

は、たしか金銭の貸借に、利息は取らぬとの仰せに、ムりましたな。

トアン　いかにも利息などは取らぬ。

シヤイ　イヤそれに就いて想ひ出てましたのは、ヤコブが叔父レーバンの羊群を監督せし時分の事蹟——ヤコブと申す御方は、その賢しい母のお蔭によりて、畏れ多くも、神祖アブラハムより、第三代の宗主と、仰がれし御方で、ムるな、左様たしかに第三代の宗主と……。

トアン　そのヤコブがいかゞ致したと申すか、利息でも取つたと申すか。

シヤイ　イヤ利息は取りませぬ。貴所様の被仰るやうな、正兵の利息は、取りませぬわい。先ア篤とお聴きくだされい。右のヤコブは、叔父レーバンの約束を結び、若し條文なり、斑點なりの、毛并をせる仔羊が生れたなら、雇賃として、それを貰ひ受けることに決めましたので、やがて秋も

暮れ、交尾の時期に向ひますると、牝羊は牡羊の後を纏けつ、廻しつ、子孫繁殖の道を講ずるに忙がはしい。時分はよしと、流石は斯道に老熟い牧羊者の妙案、一種の木の枝の皮を剥ぎて、交尾の最中に、それを牝羊の眼の前に立てた。それから、その羊どもが懐妊と相成り、やがて出産期に及びて、産みおとしたる仔羊を見れば、何れも皆斑點入りのものばかり。乃て、これが悉皆ヤコブの所有に歸したと申すも、嘶金銭を麻けるものは、皆斯うしたもの、さうなると、上帝さまも自然見離さぬ道理、げに又不正の業さへ働かずば、麻けた金銀財寶は皆、天帝さまの恩賜に相違ムらぬ。

トアン　アイヤ、ヤコブが試みたるは、それは一種の冒険に過ぎぬ。自己の力にて作りあげしにあらずして、一切上帝の御手に鹽梅されたのぢや。

貴公は利息を取ることの辨解として、之を引例に出したか。それとも又貴公の金錢が、牝羊や、牡羊の類でもあるか。

シヤイ さアそれは拙者にも分り兼ねますが、兎に角、金子も羊并に、どしどし増殖することは出来ませう。——それはさておき、一ツ御相談の儀がムる。

トアン あれ見たか、バツサニオ、口は調法、悪魔のくせに、聖書を楯に引く法もあると見える。地獄の鬼の身にて、神明を笠に着るは、例へば腹黒き小人が笑顔をつくり、又外見の美事な林檎の中心が腐つて居る類、あゝ偽物の外觀倒しには呆れるのう。

シヤイ 口でこそ三千兩といふものゝ、こりや容易ならぬ大金。一年十二ヶ月の中より三ヶ月を數へると、さて其利息は幾何にならう……。

トアン 時に、何うぢや、シヤイ、ロック、金子のお世話はして呉れる氣かいな。

シヤイ 世話をせぬと申す譯もムらぬが、喃アントニオ様、拙者が金貸業を營んで居るといふので、貴所様は、人混みのする市場に於て、何回拙者を罵られたか知れますまい。たゞ拙者は、昵と勘忍の臍を固めて、温しく黙つて居ましたが、これといふのも、吾々猶太人の辛抱強いからの事。なア貴所は、拙者を捕へて何と言はれた。ヤレ、人非人の邪教徒、ヤレ、無宿の犬畜生と、言語に絶えたる悪口雑言、そして拙者の上衣に唾液を吐かれた。シテ其侮辱の理由はと問へば、拙者が自己の物品を、自己の手に運轉したと言ふまでの事。然るに今となつて、何うやら拙者の助力が、惜しげの口吻、餘りといへば、胴慾ではあるまいか。貴所は先刻何と言はれた。これ——シヤイ、ロック、金子を貸せ——ナントそれに相

違ふりませぬ。拙者の顔に痰を吹きつけ、戸口に彷徨く野良犬同様、拙者の軀を土足にかけし、その貴所が！貴所の今惜しきは金子ぢや。拙者は之に對して何と返答をしたらば善からうか。戯弄るな、畜生に金子があるか。山狗の分際で、何て三千兩の金子が貸せるかと、一と思ひに言ふて除やうか。それとも又、ひたぶるに低頭平身、奴隸染みたる猫撫聲、氣息を潜め、口をすぼめて、これはく華客様、この間の水曜には、この數ならぬ拙者に唾液をかけてください。何日ぞや、御土足に厥てくだされ、又しかくの折には、畜生と玉の御聲を懸けてくださいました。誠に身にあまる幸榮、その御返禮として、御用の金子を差上げます。とでも、言ふて見るか。

トアン イヤ拙者の仕打には今後とて變りはないぞい。拙者は從來通り、貴

公を捕へて、犬とも呼ばう、唾液も懸けやう、厥飛ばしもせう。されば貴公が、今三千兩の金子を拙者に貸すにしても、朋達に貸す氣では、貸さぬがよい。——勿論又朋達の間柄で、金錢の貸借に利息を取る法は、ないから、嗚で、寧ろ仇敵に金子を貸す所思で居られい。されば、萬一約束に背きもせば、些末の遠慮會釋をするには及ばぬ。直に拙者を刑罰に當てられい。

シキイ これはく強烈い御立腹、さう言はれては話がなりませぬ。實を申せば、行々は貴所様と和睦を致して、親しくお目をかけて戴き、これまで受けし戮辱をば、さうりと水に流したき拙者の本心、今回御用の金子を差上げるに致しても、利息などは一文も頂戴せぬ決心にふりまする。それをお聽許なきは、不本意千萬。拙者は單に、好意づくから申上

げて居りまするのに。

トアン それが眞實ならば、誠にその好意の程は辱ないが。

シキイ 然らば、その好意を實地にかけて見せませう。さアこれより、公證人がり、拙者と御同道なされませ。そして證書が出来た上は、保證人の儀には及びませぬ。貴所さま御一人の調印を願ひたうムるところで、一ツ、戯れに若ししかくの日、しかくの場所に於て、證書面にのせたる、しがくの金額を返済されぬに於ては、其科料として、拙者の隨意に、貴所さまの身體の肉、正に一斤を頂戴するなど、假りに決めて置かうてはムらぬか。

トアン ム、それは面白い、承知致した。拙者は、左様の證書の調印は辭退致さぬ。シテ猶太人にも人情があると觸れてくれやう。

ハツッ アイヤ拙者ゆゑに左様の證書に調印などせらるゝな。拙者は寧ろ、窮しくともこのまゝ辛抱致す。

トアン 何んの左様の配慮は一切無用、拙者に於て決して粗漏はない。今より二ヶ月以内、即ち證書の期限が盡きる一と月前に、證書面の金額に比して、三倍の價格の貨物が歸着する手筈になつて居る。

シキイ これは、愛憎の盡きる、耶蘇信者達ぢやなア、御自分達が、他人に對して、冷酷たらしい仕打をするので、他人の肚裏をも疑ぐるとは、ハテ、サテ笑止！ 喃皆様、考へても御覽じませい。よしアントニオ氏が、期限の日を誤つたと致して、拙者がその賠償の品物を請求せば、何の利益がムる。一斤の人肉は、羊、牛、山羊などの肉ほど珍重もされねば、又賣つたとて高値もせぬ。拙者は折角貴所方の歡情を求めんとして、かく

まで好意を表して居る。若し此拙者の好意を受けて呉れるとあらば、それにて満足。さなくば、これにておさらばぢや。願くはこの芳思を汲みとりて、邪推の段はゆるしくだされよ。

トアン 承つたぞい、シャイロック。拙者は右の證書に調印するぞ。

シャイ さらば公證人の許にて何れ後刻、お目にかゝります。世にも風變りのこの證書、その認め方は、貴所様のお手にて、よしなにお指圖を願ひます。拙者はこれより即刻歸宅、御用の金額を懐中致して、お後を慕ひます。留守宅を油断のならぬ手代に任せて置きたれば、それをも序でに巡検つてまゐる筈。

トアン 早う行つてまゐるがよし。

とシャイロック退場

イヤあのヘブリュー人は、何うやら眞人間の仲間入りが出来さうぢや。追々親切氣がささず様子。

トアン と言ふて、口端に甘き蜜を有ち、肚裏に毒を藏せる佞人に油断はなりませぬ。

トアン イヤ早く参らう。この一事につきては、ゆめく配慮あるな。期限より一ヶ月以前に、拙者の船が歸着するほどに。

と兩人退場

第二幕

第一場 ベルモント ポルシア邸の一室

コルネットの離子。モロッコ公子及び其扈從。ポルシア、チリサ、及び從者の面々。登場

コ公子 身どもの顔色の黒きを見て嫌つてくださるな。言はゞ撒の黒装束。東光輝はげしき日輪の隈なく照す暖國にては、共通の色でおじやる。劔戟取つては、これも天下無双の豪者射す日光の影薄く、氷柱の裡に日を送る、北國産の隨一の優美男子を連れて來て御覽じませ。身どもと比べて何方の血汐が紅なるか、互に疵を附け合ふて、戀しき君様のお眼に懸けう。(土耳其にては愛婦の面前にて疵を附け、以て愛情を表する習慣あり。又血の赤きは勇氣の附け、

信る) 憚り乍ら姫身どもの面魂にはいかなる猛者でも畏縮せぬはない。又この顔が、本國の姫御前どもから、ヤンヤと言はれて居るのも事實。最う些とばかり白くありたいなど、思ふのは、君様如き優しい御方から、聊か好かれたいと、弱身があるばかり。

アホルシ あれいなア殿方の品評にたゞ眼先さばかりを典據とする妾ではないぞいな。のみならず、籤てふものは、逆否天賦、わが身の自由にはなりませぬ。さりながら、何時ぞやも申上げし、亡父の遺言、籤に當つた御方を良人にせよとの仰せさへなかつたなら、世にも名高き貴所様のことがちやもの、これまでの何の御方に比べたとて、何の不足がムリませうぞい。

モロ あゝそれ承つて満足致した。左ある上は、是非籤を藏たる、手笛とや

らに案内して、運試しをさせてくれい。畏多くも、嘗ては波斯王を斬つて棄て、まツた同國の王子にして三度土耳其王を打負したる、をらい履歴の御方をも見事に仕留し、この腰なる一刀の手前露以て誰りも申さぬ。君さまの爲めには、いかに佞悪しい眼光の漢子をも睨め倒し、いかに野蠻暴戾の猛者をも撲り飛ばして見せう。牝熊の手から、その哺乳兒を引離しても見せう。アイヤ腹を減らして餌食をあさる獅子でも翻弄つてお目に懸けう。——と言ふて、あゝ此勇氣も、さし當つての戀の役には立たぬから残念ぢや。かの希臘の軍神ハーキュリーズといへども、その家來のライカスと、雙陸の勝負を以て戦ふたなら、随分運の向き方一ツにて、家來の弱蟲が、點數多き骰子の目を轉がし出さぬとも限らぬ。かくしてこの力の神もその家來に負ける譯(ワ)ライカスイ

イズの臣也、毒衣を主に着せて死に至らしむ、ハ(キユリ)これと同じく拙者とても、見るに眼のない運の神にあやつられ、取るにも足らぬ下賤奴に、寶の玉を横奪されて、世を味氣なく、狂死に死ぬやも知れぬ。

何れとも試しの上にムります。最初より抽籤に加入されぬと仰せあらば、それは貴所さまの御隨意若しも御加入ある上は、外れし上は、生涯何れの婦人にも結婚は申込まぬと、固い誓約を立て、戴くのでムります。それゆゑ、迂濶とはなされますな。

他の婦人に結婚などは申込まぬ。いざ拙者をば早く運試しの場所に案内してください。

ボル イヤ先づ寺院に——抽籤は午餐の後にて願たうムります。
モロ 都合よく行つてほしいものぢやなア、その時は！願協つて三國一

の果報者となるか、それとも外れて男子の中の不覺者となることか。

とコルネットの離子、一同退場

第二場 ヴェニス市 街頭

ランセロット(下男にて道化者) 登場

ランセロット、あの猶太人の、且的の家などから出奔したとて、格別謹めるや

うな良心でもあるまい。鬼どのは俺の耳元に口をさし寄せ、これく

ゴボ……ランセロット、ゴボ……ランセロットどの……では無か

つた、これくゴボどの……でも無かつた、これくランセロット、ゴ

ボ殿脚があるなら、足元から鳥の飛び立つやうに逃げてしまいと、出

奔をすゝめる。すると我良心は、それを遮り、それは以ての外の了簡違

ひ、爰ナ正直者のランセロット、氣をゆるすな。爰ナ正直者のゴボよ、氣を
ゆるすな……。イヤ矢張り上に言つたやうに、爰ナ正直者のゴボ、ラ
ンセロット殿よ、逃げてはならぬ。驅落などには、後足で土砂を打っかけ
て、振り向いても見なさるなと言ふ。すると度胸の据はつた鬼どの、重
ねて出奔をすゝめ、さアくくだの、いざくくだの、とく勇を振
つて構はず逃げよだのといふ。さア良心どのの御心配、俺の胸倉に縫り
ついて、分別臭いことを言ふ。爰ナ正直者のランセロットどの、お前は元
より正直な父の倅——こりや實は、正直な母の倅と言はねばならぬ
ところで、父親の方は、チト黄ナ臭い、ブンと鼻に来るやうな事をした
といふ話。それはさておき、良心の方では、これランセロット出奔をする
な。鬼の方では、出奔をせいで、重ねて又良心の身では、出奔をするな、仕方

がない、今度は自分の番、これ／＼良心、全くも前の言ふ通りだ、これこれ鬼、全くも前の言ふ通りだ。――良心の勝手になれば、俺の身は且的の家に留まらねばならぬが、濟まない口上だが、且的は悪魔の片割だ。若し又且的の家から逃げ出せば、鬼の配下につく譯だが、鬼といふものは、憚り乍ら悪魔の正体だ。何れにしても進退谷るが、兎に角且的は、あれは悪魔の化身に相違ない。又俺の良心は、斯んな且的と同居せいと、勸める位の良心であつて見れば、良心中ても餘程六ヶ敷家の方だらう。之に比ぶれば、鬼は餘程深切な忠告をして呉れる。ヨシ／＼鬼、俺は逃げ出すぞ。行くも留まるも貴公の仰せたゞ一ツ、俺は逃げ出すぞ。

父のゴボ旅を提げて登場

ゴボ 若しく、若旦那、シャイロックといふ猶太人の邸宅へは、いかゞ参る

のてがすな、教へて戴きたいものでムります。

セラ 〔旁白〕オーヤ、オーヤ／＼／＼！こりや俺の肉親の親父どのぢやないか。日頃眼病で霞眼の域は、遠に通る越し、最う闇雲眼位になつて居るが、道理で俺の顔が分らずに居る様子、よし／＼これから御檢分に出掛けて呉れう。

ゴボ モーシ、若旦那、シャイロックと申す猶太人の御宅へは、何う参るのでがすか、教へて戴きたらムります。

セラ 次ぎの曲角を右に曲つて行きなさい。最も就中その次ぎの曲角は、左に折れて行く。それから、その次ぎの曲角では、是非右にも折れず、左にもそれず、遠廻しに、ふらく／＼と、その猶太人の家へ舞ひ込んで行くつしやう。

ゴホ ホ、ホ、こりや一と通りの、分り難い場所ぢやない時にその御方の御宅に、ランセロットと申す小僧が同居して居る筈ですが、今でも矢張同居して居るが、それとも居ぬか、御存知はムリますまいか。

セラ ナニお前は、若様のランセロットさまの事を聞かれるのかいな。[旁白] さア皆様よく御眼をとめて御覽じませ。これより親父の眼から雨を降らせませう。——なア御老人、お前の尋ねる御方は、若様のランセロット様の事かいな。

ゴホ イヤ若様など、申す立派なものではムリませぬ。ホンの貧乏人の小僧でがすわい。實はかく申す拙者がその小僧奴の親で、自分の口から申上げるのも異なるものがすが、これでも至つて正直な、至極の貧乏人、お蔭様で、何うやら安樂に生計を立て、居ります。

セラ 親などは何うであらうと御勝手、俺達は、若様のランセロット様の話をして居るのだ。

ゴホ して見りや、貴所様とは御別懇の間柄と思はれますが、矢張單獨のランセロットで澤山な奴で。

セラ それ故願つて居るではないか、それゆゑ拜んで居るではないか。お前は若様のランセロット様の話をして居るのかといふに。

ゴホ ハイ、そのランセロットの事。

セラ それ故若様のランセロット様のことだと言ふて居るに、が、しかし親父さん、若様のランセロット様の話は、お廢しなされい。この御方は、前世の因縁とやら、定命とやら、天命とやらで、モ、現世には亡い人だよ。イヤお前達にも分るやうに、モット平易言ふと、あはれ果敢なくも、黄泉

の客となられた。

ゴホ ビーそりや飛んでもねい話ぢや！小僧奴は俺の老後の杖とも柱とも、日頃依頼にして居たのに。

セラ くれ〜お前の眼には俺の軀が天秤棒、支へ棒、杖、柱の類と見えるのか。俺の顔が分つたか親父さん。

ゴホ アーア若旦那貴所様が何誰様かは存じませんが、自家の小僧が生きて居るか、それとも死んだか、早く聞かせて安心させてお呉んなせよ。

セラ これ〜親父さん俺の顔が分らないかよ。

ゴホ 情ない事には拙者は霞眼、頓と分りませんが。

セラ イヤお前は眼が明いて居たとして、元來の文盲者、とても俺のことは

分るまい。餘程眼識のある父親でなければ、吾が子の判別はつかぬものだ。さア親父どの、お前の悴の身の上を語つてさかせる「跪くこと」先づ俺の無事でも祈禱してお呉れ。隠すより顯はるゝはなしとやら、穂に出るものは尾花に限らぬ、人を殺して、誰が最後まで隠し果せた。人の子は隠せるものゝ、それでも終にはわかる習ひ。

ゴホ これ〜立つて見せて呉れよ。お前がよもや、悴のランセロトては、あるまいが。

セラ これ〜親父どの戯談はこれにて中止、先づ祈禱でも依みます。何を隠さう、斯くいふ拙者がランセロト、さきにはお前の御令息、現下にてはお前の悴、行々はお前の赤ン坊。
ゴホ いや〜悴とは、何うしても受取れぬ。

セウ 前が何と言はうとて、兎に角俺はランセロットだよ。シャイロックの下男だよ。そしてお前の女房のマーガリーといふのが、たしかに俺の母親だ。

ゴ 成程俺の女房はマーガリーと言ふ名前だつた。して見ると、貴様が若しランセロットに相違なくば、矢張俺の肉親の倅に相違ない道理や。イレヤレ〜こりや難有い話——ヒヤ、貴様は何といふ髯面になつた。(ランセロットの後ろ向きになれるを知) 顎の毛が自家の荷馬のドピンの尻尾よりも濃く生いて居る。

セウ して見ると、ドピンの尻尾は逆生に生いて来ると見えるナ。先達見た時分には、たしかに彼奴の尻尾の方か、俺の顎の毛よりと濃かつた。

ゴ ヤレ〜貴様は見違ひるやうになつたなア。何うぢや且那樣との

セウ 折合は善いか。俺は且那樣に手土産を持参した。折合はよいかよ。

左様、何んなものかなア。尤も、兎に角俺の方では、驅落と腹の蟲を据ゑた以上は、五里か、七里突ツ走しつた上でなければ、決して落着くことではない。自家の目的は横から見ても、縦から見ても、正眞の猶太人眞人間ではない。且的に手土産を持参！笑はせるぜ。それよりも絞首の索でも呉れてやるが善い。俺は彼様ナ家に奉口して、お蔭で全然干乾になつて仕舞つた。これ覽なさい、一本〜身軀の指が助骨七勘定が出来る。何れにしても親父さん、お前は善い機會に來て呉れた。その土産は、そっくりその儘、バッサニオ様と申す若旦那に贈つてお呉れ。その若旦那は、立派な定服を下男等に被せるぜ。若しこの旦那の家に奉口が出来ぬに於ては、千里でも二千里でも何處迄でも俺は逃げて行

く分の事——ヤ風評をすれば影とやら甘い所へその若旦那か来な
すツた。さア親父どの、早速行つて依んで呉れ。この上猶太人の且的
などに奉口して居りや、自分も猶太人の片割人間ぢや無い。

バッサニオ及びレオナルド(前者の)其他従者登場

バッサ おゝそれにて差支はない。尤も成るべく取急ぎて、晚餐の用意は遅
くとも五時までには調ふやうにせい。又これなる書状を、先方に手渡
すどを忘るゝな。それから定服を注文し、その足にてグラチアノを訪
問れ。直ちに邸へ参るやう傳へてまゐれ。

と下男の一人退場

セラシ 親父どの、さア御挨拶〜。

ゴホ 畏れながら旦那様！

バッサ おゝ誰ぢや！何ぞ身に用事があると申すか。

ゴホ こりや拙者の悴でムリまするが、可哀相な小僧で……。

セラシ (父を押し返す)エ、可哀相な小僧ではない。畏れながら、あの金満家の
猶太人の下男で、さし當り、後生一生の願がムリまするが、詳しい事
は、(と父の背後)これなる親父が申上げまする。

ゴホ 別儀でもムリませぬ、悴奴の希望といふは、世に言ふ御奉口の筋で
……。

セラシ (又出張)長い短い搔いつまんで、手短かに申上げますると、實は拙者
は、あの猶太人の奉口人で、所が一ツ旦那さまに願がありますと申
すは、(と又引返)何れこれなる父が、これから申上げまする。

ゴホ 旦那さまの前ながら、その猶太人と悴とは、何うやら、その犬と猿、餘

り折合が宜くも無いやうな譯で。

セラ
（又出張）早い話が、實は此猶太人の且的奴が、拙者に對して非道の振舞乃て、拙者も勘忍ならず、終にその（むと又引込）イヤ詳しい事は、拙者の親父も、流石老人の事故、これより段々申上げます。

ゴホ：旦那さま、この通り拙者は、鶴を持參して居るでがす。これは旦那様へ差上げたうります。所で、拙者の願の筋と申すは……

セラ
（又出張）手短かに言つて仕舞ふと、願の筋と申すは、かく申す私の身に干渉した問題、何れ段々親父の言葉を、お聞きくだされば、分ります。イヤ私が申上げるのも異なるものなれど、親父奴は、老人ながら、抑も又貧窮の身の上。

パッサ
これ／＼誰ぞ一人にて話すが善い。一體何の願であるぞ。

セラ
旦那様へ御奉口が致したいので。

ゴホ
たゞそれ丈の儀に過ぎませぬ。

パッサ
其方のことは兼ねて善う存じて居る。願の儀は聞き届けてつかはすぞ。實は今日其方の主人、シャイロックと面談致したが、シャイロックも、呉れ／＼其方のことを推薦して居つた。尤もあのやうな金満家の祿を離れて、拙者如き貧乏紳士の許に奉口するは、敢て出世とも申されまいが、喃。

セラ
これは御言葉とも覺えませぬ。古の諺にも、身に附いた寶が黄金にまさる寶なりとあります。これは誠に自家の且的と貴所様との、切當嵌まつた名言と存じます。貴所様の有たるは、心の寶、シャイロック且的の有つて居るのは、たゞの黄金。

バツサ イヤ感心なことを言ひ居る。さア親人、悴を連れて行くが善い。して
 舊主人より暇を貰ひ受けた上にて、拙者の邸に尋ねてまゐるとせい。
 「從者に向ひ」其方達は、この者の爲めに衣装を誂へて遣はせ、同輩のよ
 りも、立派に紐の紐を附けて、よく面倒を見てやるが善いぞ。

セラン 親父どの、まア此方へ御座れ。ナントこれでも俺様は祿離れの素餐
 者だらうナ。これでも辨口のきけぬ間拔者だらうナ。何うだ感心か。時
 に（己の學を）以太利廣しといへども、この俺さまのよりも結構な手
 相の人間が、又と居るだらうか。俺は非常な幸運を有つて生れて居る。
 賣卜者に言はせると、これがその、お粗末ながら長命の筋、又此方のは、
 こりや女房を澤山持つ筋……。ナニ斯ンものは取るには足らぬ
 さ。十五度女房の變更をするなどは、へい、情なくて泣きたいやう

だ。たつた一人の男の身で、寡婦が十一人、處女が九人、併せて二十人、悉
 く御手に懸けまくもあやに畏き次第也サ。それから水難を三度助か
 て、一方に肉薄團の上にて、女難の患があるなどは、此奴ア下さらない
 助かりやうだ。兎も角も、よく世間の人が言ふやうに、運の神様が、實際
 女の神だとすりや、中々憎からぬ少女さネ。さア親父どの、出掛けやう。
 これから早速押し懸けて行き、瞬する間に、且的から暇を取つてお眼
 にかける。

とランセが兩人退場

バツサ 時にレオナルド、其方には大切の依頼がある。是等の品物を残りな
 く買ひ入れ、それを悉皆船内に積み入れ、そして早速歸つてまゐるの
 ぢや。今宵は親友を招きて酒宴を張るほどに、急いで行つてまゐれ。

レオ 承りましてムリます。成るべく退う致してまゐります。

クラチアノ登場

クラ 御主人は何所に見えられるな。

レオ それ其所に御徒歩になつて居られます。

と退場

クラ やアバツサニオさま！

バツサ さう言はるゝはクラチアノ！

クラ 拙者はお願の儀があつてわざ／＼参上。

バツサ 何なりと聴いてやるぞら。

クラ 不承知は言はせませぬぞ。拙者は是非ベルモントへ隨行致したき
了簡

バツサ

是非とあらば是非行くが善い。たゞクラチアノ、和主には注文があるぞい。和主は兎角行儀が悪くて、言葉遣ひが粗略で亂暴過ぎる。是等はつまり和主の天真が露はれし所で、よく平生の氣性に適ひ、日頃親しく往來する吾々にとりては、缺點と何とも見えはせぬ。たゞ他人の間に混つた折には、聊か我儘勝手の誹謗は免れまいか。因て先地へ行つて居る間は、少しは行儀作法といふ、窮屈な事も守り、和主の氣性の剽輕すぎる所を抑へて欲しい。さもないと、和主の亂暴な舉動から拙者までも誤解を招ぎて、散々の失敗を重ねぬとも限らぬ。

クラ おツと其點に脱瞞のある拙者ではムらぬ。御安心あれ、確かに生真面目な態度をして、御丁寧な言葉をきいて、野卑な文句は大概除物衣袋の裡には祈禱書を入れて、さも謹直な顔容。食事の際に祈禱があら

ば、先づざつと斯んな風に、帽子を脱いで眼の上に翳し、溜息をついて、
 アーメンと唸り、苟くも禮儀作法に關した事柄は一から十まで悉く
 守り、さも平生から御祖母さまの御機嫌取りの、堅苦しいお行儀に、慣
 れ切つて居ると、言はぬばかりの顔をして、御眼に懸けます。若し首
 尾よくこれが出来なかつたなら、貴殿から生涯信用を失つても敢て
 苦しうはムらぬ。

バツサ 氣をつけて貴公の素振を拜見して居やう。

クラ は——イヤ併し今晚だけは例外でムるぞ。今晚の拙者の態度を以
 て、他を推察されてはやりきれませぬ。

バツサ イヤ今晚から氣取込まれては、それは拙者に於ても却つて迷惑、今
 晩は寧ろ思ひ切つて、羽目を外して、一番和主の陽氣な所を見せて貴

はう。今晚の賓客は、他まで皆大に浮かれやうと覺悟を決めて居る親
 友のみぢや。それはさうと、拙者はこれにて、霎時分れる。いさゝか用事
 を抱へて居る程に。

クラ 拙者もロレンゾ其他に會はねばならぬ身が、いづれ晚餐の時刻に
 は一同揃つて參上致すてムらう。

と一同退場

第三場 同市 シャイロック住宅の一室

ゲエシカ(シャイロック)の獨り娘)及びアンセロット登場

カゲシ 斯うして其方に暇を取られると、妾ア心から残り惜しいわいなア。
 地獄のやうな此家も、陽氣な其方が居たゆゑに、どの位退屈しのぎに

なつたか知れぬ。そんならこれで分れるぞい。この一兩の金子は僅少ながら取つておきや。シテ、ランセロット、其方の今度の御主人様が、今宵催さるゝ宴會の席には、ロレンゾぬしが見えやうほどに、その折この書狀を手渡したも。人目に觸れてはならぬぞい。さアこれであらばぢや、其方を相手に、内證話をする現況を、父に認められては一大事。そんならお嬢様、これがお訣別！ 涙の雨に、拙者の舌の根は沈魚落雁。嗚呼異教徒乍らも稀れなる美人、猶太人とは言へど上品の素質！ ハテ、こりや的切あの且的の種ではないぞ。和女の母御がこつそり目棲を忍び、夫かはす枕の重りて、それて製造へたのではあるまいか。イヤお嬢様、そんなら御無事で。活智のない愚痴の輩に、何んだか元氣が沈み加減で耐りませぬ。御無事で……。

アエシ 其方も無事で。

とランセ退場

あゝ耻かしい妾の身の上、父の娘と呼べるゝを、面目なく思ふとは、まア何といふ罰當りな！ とは言ふものゝ、親子の縁はたゞ血筋の上、性行の上の隔りは、東と西に離れ、父でなければ、娘でもない。依頼にするはロレンゾぬし、兼ねての誓詞をお忘れあるな。さすれば心の煩悶も、何時かは過去の夢と消え、宗旨も籍も甲斐なく、しく、妾アお前の天下晴れての女房ぢやぞい。

と退場

第四場 同市 街頭

グワチアノ、ロレンツ、サラリノ、及びソウニオ登場

ンロレ イヤ心配さるゝな。晚餐の折に潜かに座を外して拙者の宿に参り、
假装を施して戻つて参るまでに、一時間もあらば充分ぢや。(マスケ(假
つきての下相談と知るべし。)
當時宴席などに流行せる也。)

クラ と言つて格別の準備も致して居らぬのみか、

リサラ 肝腎の炬火夫の用意も致してない。

ニソラ 折角の趣向も、見事に行かぬは散々なもの。拙者も寧ろ中止の方に
手を舉げる。

ンロレ ても漸く四時になつたばかり、準備の時間がまだ二時間もある。

ランセロット一通の書状を携へて登場

や、ランセロットの大将、何の御用ぢや〜。

セラ 此書状の封を切つて御覽になれば、事明細に分るてムらう。
ンロレ その手ならば聞かずと分つて居る。イヤ全く奇麗な手、書く紙より
も遙かに白き玉の御手。

クラ 情人からの附文ぢやナ、それは！

セラ 拙者はこれにてお暇を戴きたらムリまするが、

ンロレ これより何れへ参るのぢや。

セラ 實はこれより舊の目的を訪問れ、今度の御主人様が催さるゝ今夜
の宴會に招んでまゐる所。

ンロレ ちよとこれを持つて行け(と金子を典)してデシカに逢つて、委細か
してまつたと傳へて呉れい。たゞし内密に申すのぢやよ。

とランセ退場

さア、方々、今夜の假裝狂言の準備に取懸らうてはないか。炬火夫は拙者の手にて整つた。

リサ　よし、承つた。これより早速出懸けてまゐらう。

ニソ　拙者も左様致さう。

ンロ　然らば凡そ一時間を期して、グラチアノの宅に參集されい。拙者も同所に待つて居る筈。

リサ　委細承知、それが善からう。

とサラリ、ソウニ兩人退場

ク　時にその書状は、それはデシカ嬢から參つたものと見受けるが。

ンロ　和主には是非逐一白状致しておかねばなるまい。これは全くデシカからの艶書、中には拙者との驅落の手筈萬端をはじめとし、既に搔

き纏めし金銀珠玉、又用意せる少年の服裝のことなど、細々と認めてある。あゝあの鬼見たやうな父にして、若しも行々地獄にも墜ちずに濟むなら、それは確かにこの優さしい娘御のお蔭。若し又この天女の身に、不幸の雲の纏ふとせば、それはかゝる猶太人などを父とせる身の因果と諦めるより外はない。さア、行かう。書状は歩みながら讀むが善い。今夜の炬火夫の役は、可愛いデシカがつとめる筈。

と兩人退場

第五場 同市 シヤイロック住宅前

シヤイロック及びバウシセロット登場

シヤイ　イヤ、盲目でなければ、此シヤイロックとバウサニオとの差異位は分る

管、よく眼を明いて見るが善い。——コーラ、ヂェシカ！（と大聲）——呉れ
くも汝に言ひさかせて置くが俺を食ひ倒したやうに、以後は大食
をせぬが善いぞ。——コーラ、ヂェシカ——それから、今迄のやうに朝
寝坊をして高軒をかいて、そして四季施をビリ／＼に引き断つては
済むまいぞ。——ヤイ、ヂェシカ、ヂェシカと申すに！

セラシ ヲ、ヤイ、ヂェシカと申すに！

シヤイ エ、八釜しいわい。誰が汝に呼べと伝附けた何時伝附けた覺があ
るかよ。

セラシ でも伝附けなければ何もせぬ無精者だと、旦那は所中叱言ばかり
言つて居たくせに。

ナシカ登場

ヂェシ お召喚になつて？何の御用でムンすぞい。

シヤイ 俺は喃、ヂェシカ、宴會の席に招かれて、これから出掛けるのぢや、俺は
ソレ其所に置いてあるぞ、が何うも氣がすゝまぬな、格別好意づくで、
此招待を寄越したのぢやなし、ホンの外面ばかりの御世辭に過ぎな
い。と言つて、行かぬのも業腹、俺の方でも悪意づくで行くとせうわい。
行つて、あの道樂者の料理でも食ひ散してやらうわい。善いか、娘、よく
自家の監視をして居れよ。俺は行くのは誠に厭てならぬ。昨夜金の財
布を夢に見たが、こりや何ぞ、目出度くない事が、起りかけて居る證據
ぢや。

セラシ イヤ旦那、其様ノ事を言はずと、後生だから行つてください。主人も
折角旦那の御奮發をお待ち兼ねの躰。

シヤイ 俺は又汝の主人の御憤激を待つて居る。

セラシ 所て今夜は、皆さまの間に種々御趣工の餘興もムります。と申して敢て旦那に、狂言の御見物を、無理に御勸誘は致しませぬが、若しひよとして、それを旦那が御覽とあらば、今更思ひ當る不思議の節々、忘れもせぬ、去ぬる復活祭の月曜日、午前六時と申すころ、拙者の鼻孔から流れ出てたる鼻血のくれなる。さても、さても、その年の聖灰祭に、たつた、たま／＼、午後の四年目……。(鼻血の出るは、當時不吉の兆と思惟し、幸の來歎すべし、シヤイ、ログの身に不)

シヤイ 何に！今夜狂言の催しがある？これ／＼ヂェシカ、嚴重に戸締をせいで。そしてあの騒々しい大鼓の音や、振れ首の横笛の聲が聞え出したなら、夢にも窓へ登つてはならぬ。又首を往來に突き出して、粉黛立て

た浮れ男子に秋波などを興れてはならぬぞ。よく家の耳に蓋を致せ。ハテ窓を締めろといふことよ。此物堅い家の内部を、悪るふさげの聲で汚されてたまるものか。あゝ宴會などに招かれたら、何ともない。が行くとせう。ランセロト、汝は一と足先さへ行つて、あとから俺が行くと傳へてやれ。

セラシ 然らばお先さへ御免——モシ／＼お嬢様、何の御遠慮に及ぶものか。窓へ近寄つて御覽遊ばせ。

いとしい殿御がツイ通るはづ、
一と目見たとて御損にやならぬ。

と退場

シヤイ あの下司の白痴が、今何と言ひおつた。

ナニと嬢さまおさらばと申したまで、他に何とも申しはせぬわいなア。

イヤあの下郎根性はさして悪くもないが、たゞ何うもえらい大食家ぢや、主用にかけては蝸牛をツち退けの大鈍物、晝中にも散々眠つて、野良猫も跳足で逃げ出す有様ぢや、元來用事の多い此家、とても彼様ナ素餐者は畜つておけぬ、因て今回解僱した譯であるが、それをわざと、あのバツサニオに向けてつかはした詰まり、これは、借金で膨れたあの男の財布を軽くしてくれやうといふ、苦肉の妙計——何はしかれデ、シカ、其方は内に入つて居れよ、多分俺は直に戻る。伝附けた事は忘れるな、入つた後はよく締めておけ、油断大敵、用心が肝腎とはよく言つたもの、精勤者には、毎々耳新らしく聞ゆる謔ぢや。

と退場

早うお歸宅なされませ——さて、これから、手筈の上に齟齬がなく

と退場

ば、今が親子の生別娘は父、父は娘を失ふ譯。

第六場 同前

クラチアノ及びサワリノ登場、兩人假装、

クラ ロレンソが吾々に、待合はせよと申したは此廂下。

リサワ 最うかれこれ約束の時刻が過ぎて居るが。

クラ げに不思議、あの男が、約束の時刻に遅るゝ理由が分らぬ、色男といふものは、必らず時計の先き廻りを致すものぢや。

リサラ ホンに御説の通り、鳩車驅る戀の女神も、男女の間に、新たに赤繩を
 結ぶとあれば、その時の車の迅さは又格別、氣ののらぬ、古い夫婦仲の
 融解に行く時よりは、十倍も迅いとやら、(戀の女神ウエナスはキミビドと
 共に鳩にひかせたる車に乗
 る)

クラ イヤ何事も皆さうぢや、食卓を離るゝ時には、誰しも初めて席に着
 ける時ほどの食慾はない、又いかに鍊れたる曲馬も、二度目からの藝
 盡しには、初めの元氣は失せる道理ありとあらゆる天下の事物は、そ
 れを手に入れる迄が最も愉快、濟んだ上は皆氣が抜殻、善い例は船舶
 にもある、満船飾旗を翻して、故郷の港灣から纜を解く時は、年齒尙ほ
 若い蕩樂息子が、綺羅を飾つた體たらく、吹く風さへも媚々として、春
 を賣る手弱女が、袖にまつはる如くなりぢや、然るにそれが歸港の様

を眺むれば、浮世の海にもまれく、見る影もない零落れ様、船舳は
 雨雪に蝕まれ、白帆の類は寸断く、に裂け、淫婦の本性さらけ出せる
 無情の風の颯りもの、前後正躰なさない姿となつて居る。

リサラ ヤ、いよく、ロレンゾの御入來、和主の説法は、何れ後刻。

ロレンゾ登場

ンロレ 何れも、かく遅刻致したる罪は、平に御容赦、これは差迫つた用事の
 謎、拙者の所爲では、ムらぬ、イヤ、卿達が行くく、女房の件にて、忍びの
 術を行ふ場合もあらば、その時は、今日の御恩返しに、拙者が存分待つ
 てあげる。——依も、誰ぞ居られませぬか。

アエシカ登場、階上、少年の服装

アエシ さう言はるゝは何誰で？念の爲め、名告つて戴きます。とは言ふ

ものゝ何うやら心當りのある御聲。

ンロレ ロレンゾぢや君の爲めにはうれしい人。

アエシ ホンにロレンゾさま、ホンにうれしい御方——これほどうれしい御方が、何れにムンせうぞい。又此戀仲の秘密を知るは、廣い世界にお主が一人。

ンロレ アイヤ知つて居る者が、まだ二人ある。一人は神様、一人は和女……

アエシ ちよと此の筐を受取つてたも、受取つて御損にはならぬぞい。さるにても、これか晝間でなくて何より僥倖小姓姿の此變姿が貴郎の御目に留まらずに濟むわいな。尤も戀は聞恥辱外聞も眼には映らぬものとやら。さもない日には、何てこの姿が人目に懸けられませうぞい。早く降りてたも、今夜の炬火夫は、是非和女に依まねばならぬ。

アエシ エ、身の耻辱をさらす爲めの燈火をわが手に持てと言はるゝか。光がなくも氣がひけて、穴にも入りたい妾の身。それに炬火夫とは露

顯の役目、隠れ得る丈隠れる筈の妾には似合はぬことぢやわいな。

ンロレ ナニ少年の假装をした丈にて大丈夫、少しも目立つことではない。兎に角早く降りてくれよ。さういふ中にも、夜の黒幕は剝けて行く。又

アエシ バッサニオの宴會に赴いてからも、尙ほ宴時足を留めねばなるまい。そんなら急いで戸締して、路用の銀子を今少し身に着け、すぐに側に行くわいな。

と階上より退場

クラ アイヤ何う見ても高尚優美の手弱女、柔順にして猶太人にあらずか。
ンロレ 心から彼娘を愛することの出来ぬとあつては、このロレンゾは男

子でない。胸のかゞみにかけて見れば、デシカは賢女、眼てながむれば正しく美女、舉動から考ふれば確かに貞女。かく賢女、美女、貞女と、三拍子揃つた上は、是非とも末長う、わが借老同穴の侶とせねばならぬ。

デシカ登場、階下

あゝデシカよく来てくれた。さア何れも早速出掛けるとせう。狂言の連中がさぞ待ち兼ねて居るであらう。

とデシカ、サラリノ兩人を連れて退場

アントニオ登場

アント 其所にあるは何誰であるな。

クラ やアアントニオ様！

トアン チッ、グラチアノか、何して居るぞ。他の方々は何所へ参つた最るか

れこれ九時、皆卿達を待つて居る。今夜は狂言は中止ぢや、風位が吹き直つたので、バツサニオは最う追ッ付け乗船拙者は、二十人も人を走らせて卿の行方を搜索して居た所ぢや。

クラ あッと賛成、今夜中に出帆とは、こりや何よりの吉報。

と兩人退場

第七場 ベルモント ボルシア邸の一室

コルチットの離子、ボルシア及びモロッコ公子、其他双方の隨員登場

ボル さア帳をのけて、貴賓さまに、のこらず手筈を、お覽せ申せ。——いざお選みのほどを。

モロ どりやく、第一は黄金の手筈か、これがその文句ぢやな。——

「われを選ばむものは、多くの人が望むものを獲む。」

第二は銀の手筈、その題辭は何とある。――

「われを選ばむものは、其人にふさはしき丈を獲む。」

第三は寝惚色の鉛の手筈、文句までが又無骨に出来て居るナ。――

「われを選ばむものは、持てるすべてをさしげ、すべてを賭せよ。」

ハアテ何と致して、當籤が抽けるであらう。

ホル 三個ある中の一個の手筈に、妾の肖像が入れてムリます。それを

お選みの上は、不束な妾の身は、和郎さまの御許に嫁りますぞい。

モロ かゝる時にはたゞ神依み、よい分別を授けて惜しいものぢや、どり

や今一應篤と文句を味ふて呉れう。この鉛の筈には何とあつたナ。――

「われを選ばむものは、持てるすべてをさしけ、すべてを賭せよ。」

フムすべてを捧げるもよいが、何が爲めに捧げるのぢや、鉛の爲めか。鉛の爲めに賭するのか。この手筈は人を脅迫する。苟くもすべてを賭するとあらば、誰とて希望の光明を前途に望むからぢや、千金の子は、檻檻鐵厨の類に腰はかゝめぬ。鉛の爲めにすべてをさしげ、すべてを賭するは身ども眞平ぢや、然らば此無垢純白の銀製の手筈には何とあるな。――

「われを選ばむものは、その人にふさはしき丈を獲む。」

フム正に其人にふさはしき丈とあるナ。こりやモロッコどの素通りは出来ぬぞ。公平に御自分の眞價を量つて見い、御自分一個の鑑定によれば、勿論その資格は充分ぢやが、待てよ、その充分といふ中には、或はボルシア姫までは含まれて居ぬかも知れぬ。と言つて、われと吾が資

格を疑ふは甚だしい不見識。フム身どもにふさはしき丈！こりや的切姫ぢや。姫のことぢや。門地の上から觀ても、身どもに資格のあるは言ふまでもない儀。又財産といひ、人品といひ、遊藝の素養といひ、何につけても不足はない。就中このこがるゝ情思が、婿の資格の中の第一、こりや最う道草を食はずに、これを選ぶとせうか。イヤ待て！今一應黄金の筥の文句を讀んで呉れう。

「われを選ばむものは、多くの人が望むものを獲む。」

ハテこれが姫のことぢやな。姫を手に入れたいとは世界中の希望、地球の隅々隈々から、人界に御姿をあらはし玉へる。この天津乙女を拜みに集まる男子は無數、ヒルカニアの大沙漠でも、際涯なき亞刺比亞の荒野でも、今はポルシア姫に逢ひたい、見たいの王子公孫の通ひ路。

狂瀾怒濤天を拍つ青海原も、外國の殿原を引きとゞめん關とはならずして、恰かも小溝でも飛び越すやうに、それを乗り切つて拜みにまゐる。并べた筥はすべて三種類、その中の一個に、姫の御肖像が入れてある所、鉛の筥などに果して之が入れてあらうか。イヤ、勿体ない。斯んな事は夢に見ても聞か當らう。鉛などは、墓場の底に葬るべき棺桶の用にも不足ぢや。然らば銀の手筥に雲隠れして居られるかな。と言つて、銀は黄金に比べて、十倍も廉い所を見れば、これも矢張り勿体ない譯。これほど貴重の寶物が、古來黄金以下の物に包まれて居た例はない。現に天使の姿を刻める金貨が英國に在る。たゞしそれは表面に附着し、この天使は又黄金の床にすやくと御安眠。さア鍵を渡して貰ひませう。身どもは之を選定した。當るか、當らぬか、それは固よ

り運次第一

サッ さらばお渡し申しますぞい。して若しも妾の肖像が、その内にあり
ましたなら、その時は妾は言ふまでもなく和郎さまの所有。

とモロコ公子黄金の手筈を聞く

モロ やア南無三寶！何物ぢや、これは！たゞ見る一個の髑髏、その物も
無き眼窩の中には一片の巻紙が入れてある。どりや其文句を讀んで
つかはさう。

光るものとして黄金ぢやないとは。

古るい髑髏たれも知る筈。

表面の色にたゞ欺されて

命まで賣る世のおろかもの。

金色の墓中に蟲あり。

年齒がわかくて思慮が深く、

きついが能の和主でなけりや、

愛憎づかしは言ふまいものを、

最う用はない一昨日御座れ。

ヤ一昨日とは飛んだ御苦勞、

花にや緑ない冬枯のそら。

ボルシア姫、これでお暇申す。胸の裡がくさくして、長文句の告別な
どは口に出ぬ。世の失意の士の去る時は皆斯くの如しぢや。

と冠従を率ゐて退場、コルネットの雛子

ボル お手柔かな厄拂ひ、これにて一と先づ安心。さア早う帳をかけるが

よい。黒ン坊の殿方は、皆この流儀で首尾よく鏡に外れて惜しいものぢや。

と一全退場

第八場 ヴェニス市 街頭

サラリノ及ビッラニオ登場

リサラ あれさ、拙者はバッサニオが出帆する所を目撃して来たのぢや。同行者中にはグラチアノが見えたが、確かにロレンソは居なかつた。

ニソラ 忌々しいのは、あの猶太人の悪黨、八ヶ釜しく言ふて君公さまを驚かし奉り、とうとう連立つて、バッサニオの乗船の検査に参つた。

リサラ 所が、それが時期に後れ船は正に帆をあげて出やうとする間際で

あつた。然るにたま／＼ロレンソ、デシカ兩人が、手に手を取つて小艇の中に居る所を見たものがあるとの報知が、この時君公さまの許に届いた。其上アンドニオが又、決して兩人が、船中に居ぬ由を、君公さまに確證した。

ニソラ イヤ、観ものぢやツたのは、あの時のシャイロックの怒號具合さ。あの猶太人の畜生が、街々て吐しおつたやうな、彼様ナ無茶ナ、彼様ナ奇天烈ナ、彼様ナ、不埒ナ、そして彼様ナ八齷無性ナ怒號方は、臍の緒切つてから初めてぢや、先ア斯うさ。——ッァー大事の／＼娘！ッァー大事の／＼貨幣！ッァー大事の娘！大事の娘が、耶蘇の男子と驅落をした！ッァー耶蘇の貨幣が見えなくなつた！裁判は何うして呉れるッ！法律は黙つて見て居るかッ！大事の貨幣と大事の娘を何うす

る氣だッ！封印附の財布……封印附の大判小判の入つた財布が二個までも娘に掠はれたんだ！お負けに寶石だ、寶石が二タ粒無類飛切りの大事のく寶石が二タ粒とも、之も娘に掠はれたんだ！ヤイ裁判は何うして呉れるッ！娘を見つけて寄越さぬかッ！娘が寶石を持つて逃げた。それから又貨幣を持つて……

リサラ イヤ、ジュニス市中の小供等が面白半分その後附隨て、迷子のく寶石ヤイ、娘ヤイ、貨幣ヤイ、など、騒ぎ居つた。

ニソラ こりや、アントニオは折角用心して、約束の日限に後れぬやうにせにやならぬ。さもないと、之が爲めに辛い目に逢はされるぞ。

リサラ ホンに尊公善い所へお氣がつかれたな。實は拙者昨日、さる佛人と談話を交へた。すると、その人の言葉に、佛英兩國を區分する例の英國

海峡にて、貨物を満載したる、以太利の船舶が一隻、難破したと申す話、之をきくと同時に、はッと拙者はアントニオの事に想ひ及ぼし、その難破船が同氏の所有船でなければ善いがと、心私かに祈つたやうな次第。

ニソラ こりや、アントニオに、右の次第を報知せるが善からうぞ。最も唐突には言はぬが善い。さもないければ、何の位心配するか知れぬ。

リサラ イヤ、世界廣しといへども、あれ位親切な御方は二人とはあるまい。この間も拙者は、パッサニオとの訣別の模様を傍で見て居ました。やがてパッサニオが、成るべく早く戻るとは言ひますと、アントニオは優さしくもそれを押しとどめ、イヤそれには及ばぬ。拙者故に大切の仕事に疵をつけられるナ、機熟するまで何時までにも滞留するが

善い。拙者がシャイロックに差入れたる證文の事を憂るなどは、それは戀する身には入らざる苦勞まづ、陽氣に、全く他事を放擲し、戀の懸引色の口説に腦漿を絞り、先方の歡心を得るやうに苦心するが善い。——かく言ひながらも兩眼には雫が一抔、顔を背反けて後さまに手をさしのべ、優さしいとも床しいとも、何とも言ひやうの無い心地で、バッサニオの手を取つて、しみと握手した。さて、それから、二人は漸く右と左に袂を分つたやうな譯。

ニソラ イヤあの方は、バッサニオのあるばかりに、浮世が面白いと思つて居られる様子ぢや。さアこれから連れ立ちて、アントニオを捜し出し、何を愉快な談話でもして、例の沈鬱症を逐ひ散して呉れやうではムらぬか。

リサラ おゝそれが善からう。

と退場

第九場 ベルモント ポルシア邸の一室

子リサラ下男と共に登場

子リ サ大急ぎ——急いで帳を除けてたも。アラゴン公子には既に寺院に於て誓詞を立てられ、追ッ付け抽籤にまゐられる筈。

コルネットの離子 アラゴン公子、ポルシア、及び双方の隨員登場

ポル いゞ御覽遊ばしませ。手筈は何れも其所にムります。シテ若しも貴所さまのお選みなされし手筈の内部に妾の肖像がある上は、これより直に婚禮の儀式を挙げます。若し又それが外れましたら、貴

所さまには兎角のことを仰せられず、即刻當地を御出立になるので
ムリまするぞい。

ゴア
ンラ

余は先刻既に三個の條件を守るべく誓を立てました。第一は、余が
選べる筈の何れなるかを、何人にも口外致さぬこと。第二は、若し余に
して、正しき筈を選択し得ざるに於ては、余が一生の間、婦女に對つて
決して結婚を申込まざること。又最後の件は、若し余にして運拙く、事
失敗に終らば、即刻當地を後にすることとてムる。

ボ
ル

かく誓詞を立てらるゝは、貴所さまのみにはムリませぬ。不束なる
妾故に、抽籤に加入されし方々は、何れも右の規約に遵はれまする。

ア
ラ

拙者に於ても、兼ねて充分其覺悟は致してまゐつた。願くは運強く、
まんまと日頃の希望を達したいものぢや。さて打見る所三種の筈、金

と銀と、それから下等な鉛の筈とがあるな。

「われを選ばむものは、持てるすべてを捧げ、すべてを賭せよ。」

こりや、この鉛は不届な事を申す。すべてをさしげ、すべてを賭する前
には、今少し立派な外観を要する。黄金の筈には何とあるな。

「われを選ばむものは、多くの人が望むものを獲む。」

多くの人の望むもの——ハテ此多くの人と申すのは、性來愚鈍にし
て、單に外見に因りて選擇を行ひ、徒らに朦朧たる眼力のみを依頼と
致す所の多数人士を意味するのぢや。かゝる奴輩にかぎり、眼光は常
に裏面に達せず、かの愚かなる燕の一種と同じく、屋外の壁上、掩蔽物
も何もなき、危険の場所に、巢を構ふるの類ぢや。余はゆめ／＼是等多
くの人の、所謂望む所を選ぶまい。普通の末輩と伍を同ふし、野蠻の群

民と席を共にするは、余に於て、^{スナギ}屑からざる次第ぢやからな。さう致すと、自から足下ぢや、^{ウツ}喃銀の玉手箱の君どりや、今一應、足下の帯びたる題字を拜見致さう――

「われを選ばむものは、その人にふさはしき丈を獲む。」

こりや、文句までも名言ぢや、げに一點の長所をも具へざる身を以て、徒らに高名富貴を僥倖して可ならむやぢや、何人に限ず、己に不相當なる威儀態度を、帯びんなど、は不届の所爲。是非世の中は、儀装稱號、官爵の類、皆之を得るに道あり、純白の高名、獨り眞正の價値によりて獲得されたいものぢや、然るに伸ぶべくして却て屈し、順使さるべきに、却て指揮の大任を汚す例は極めて多い。かの花も實もある秀才の間より、拔きて棄つべき凡庸の才はいかに多からう。之と同じく紛々

擾々たる時俗の塵芥裡より、選み出すべき寧馨兒の數も亦いかに多かるべき。イヤ餘事はさておきて、早速選擇に取りかゝらねばならぬ。

「われを選ばむものは、その人にふさはしき丈を獲む。」

拙者は充分の資格があると自から信ずる。いて此筈の鍵をば手渡されよ。一身の吉左右、直に蓋を除いて查べて見やう。

と公子自から銀の手箱を開く。

*ル ホ、左様のものを開けるのに、えらいお手間の取りやう。

アウ ヤこりや何物、薄目を致せる白痴の肖像が、余に向ひて、一個の巻物を捧げて居るわい！何りや讀んで遣はさう。さるにても、汝の顔は、餘りと言へば、ポルシアに似ぬ。餘りといへば、余の希望、余の人品に相應致さぬ。

「われを選ばむものは、その人にふさはしき丈を獲む。」

エ、余は白痴の頭を貰ふだけの人物か。これが余の獲物か。余の價値はたゞこれしきのものに過ぎぬか。

ボル これいなア籤はたゞ物の判別をつけるもの、決して人を辱める爲めの物ではムりませぬ。間違ふてくださるな。

アラ ハテ何と書いてあるな、――

筐の銀七度鍛へ、

智慧のかゞみは七度試し、

それてくもりがツイ現はれぬ。

阿呆らしいのは影追ふ人よ、

手に入るものはたゞ影ばかり。

世間よく見る銀鍍の恐物、

筐の内のもまた其種類、

妻は和主が獨りてさがせ、

白痴の頭は和主にあげる。

さらば立ち去れ、いざとくくと。

斯んな所に居れば居るほど、

器量はますますさがるばかり。

白痴面さげて来たそれがしが、

白痴を土産に貰ふてかへる。

いざさらば君誓詞の通り、

蟲をさへてちツと辛抱。

とアワゴン及び其扨從退場

ボル 飛んで火に入る夏蛾の、もろく斃るゝ姿も斯くや——ても御念の
入つた白痴どの、多い世の中、いろく絞る猿智慧も、たゞ失策を招
ぐ種。

子 古い諺に、首切らるゝも、妻を貰ふも、皆これ前世の宿縁と申します
るが、更今思ひ當りまするわいなナ。

ボル 子リサ、早うその帳をかけや。

下男の一人登場

下男 御姫さまは何れにお在なされます。

ボル 爰に居るぞい何の御用か、早速仰せの程を承りたうムりまする。(わ
にざと丁寧)

下男 只ツた今、御門の邊に下馬したるは、年齒尙ほ若きヴェニス人、その御
主人の來訪を、前觸の爲め、參上致しましたる御使者にムりまする。シ
テ主人の伝附ぢやと申して、花も實もある御挨拶——と申した丈に
てはお分りになりますまい。早く言へば、御丁寧なる口上の外に、貴重
のお土産を頂戴ナ致したのでムりまする。今迄下郎奴は、これほど適
任の戀の御使を拜見したためしがムりませぬ。春去りくれば、花の風
衣を吹いてなめらかに、梢にかゝる白雲の、夏の近きを觸れて行く。イ
ヤこれにもまして、なづかしいのは、尋ね來る殿の近きを觸れにまゐ
つた、今度のお使者にムりまする。

ボル 頼いわいな、最うく廢してたも、言はせておけば圖にのりて、實は
その使者とは親戚の間柄など、今に申すやも知れぬ。修飾澤山の外

出言葉でさう讚められて耐るものぞいなさ、チリサおじや。左様に鄭
重な戀の御使とは、いかなるものか、早く行つて見やうぞい。

チリ これが、パッサニオ様であつてくださればよいが、スリ

と一同退場

第三幕

第一場 ヴェニス市 街頭

ソラニオ及びサラリノ登場

ニソオラ 時に市場の邊には何んな風評がムるナ。

リサノラ イヤ不相變、よく耳に入るは、アントニオの船が、高價の船貨を満載
したまゝ、英吉利海峽で難破したといふ風評で、たしか其邊はグドウィ
ンスとやら言ひますかいナ。一鉢に危険千萬な砂洲の名所、これまで
難破した船舶の死骸が、かす／＼埋もれて居ると聽きまするな。尤も
これはたゞ世間の風評、聞風捉影的空談に過ぎぬかも知れませぬ。
ニソラ イヤ世の風説には中々油断はなりませぬ。現にこれで三度目の亭

主に死なれた浮氣の寡婦が蓋を噛んでポロ／＼涙を流して見せ、さも實意があると近所の人を擔ぎにかゝるなども見受ける世の中、右の風説子も何卒この種類のものであつて惜しいものぢや、それはさておき、談話に際しては道草は禁物、始まつた物語は腰を折らぬことゝ致して、手短かに申上げるが、實際わが親切にして且つ又律義なるアントニオ氏におかれては——イヤ親切といふても、律義と申しても、まだ言ひ足らぬ、實に拙者は同氏に適用すべき言句を見出し難さに苦む次第で……

リサラ これ／＼善い加減に文句を端折らぬか。

ニソラ 何……何んぢやと？ ハテサ文句の結末は、アントニオ氏が、所有の船を一隻失つたと申す事。

リサラ 兎に角これを難船の最後にしてほしいものぢや。
ニソラ オット今の中に悪魔除けのアーメンの一ツも言ふて置かう。ソレ彼所に悪魔がやつて参つた、——悪魔の片割、シャイロックが。

シャイロック 登場

や、シャイロック殿お珍らしい。何ぞ商人仲間に耳新らしい奇談でもありませぬかな。

シャイ これ／＼和主は百も二百も承知の筈ぢや、自家の娘が墮落したことを——イヤ和主ほど詳しい話を知つて居るものはない筈。

リサラ それは全くその通り、何を隠さう、拙者に於ては、貴殿の娘御が高飛する爲めの羽翼を造つた、その裁縫師と別窓の間柄。

ニソラ イヤ此籠の鳥が、モ一毛並捕はぬ雛鳥でない位は、シャイロックどの

に於ても既に充分御承知の筈ぢや。シテ一鉢鳥と申すものは、羽毛が揃へば皆母鳥の側から逃げ出すものと相場が決つて居る。

シヤイ 眞に憎い雌鳥でムる。何れ地獄にても墜ちる奴。

リサウ イヤ悪魔どの、裁判では、こりや地獄に墜される筈ぢや。

シヤイ 肉を分け、血を分けた女の身で、わが言ふことをきかぬ不埒者！

リサウ これ、蠢碌奴ッ！よい年齢をして、まだ女子に氣があるのか。

シヤイ イヤ娘は肉を分け、血を分けた間柄ぢやといふのぢや。

リサウ 和主の肉と娘御の肉とは、そりや全然別物ぢや。黒玉と象牙玉との

差別がある。又血とても同様、その差異は、赤葡萄酒と白葡萄酒との差異よりも甚だしい。それはさておき、アントニオ氏が海上で損耗をしたとか、せぬとかいふ風説は、まだ和主の耳には入らぬか。

シヤイ イヤ拙者は爰で又飛んだ拙い取引をしました。彼奴は最う破産者、

お負けに道樂者、碌々市場などに首は出せませぬが、彼様ナ乞食の癖にあれても元は扮飾込んで市場へ出入したものでぢや。兎に角證文の一件を忘れぬが善い。平生俺を高利貸など、散々悪言をきいて居た。兎に角證文の一件を忘れぬが善い。彼奴これまで酔興にも無利息で金子を貸して居た。兎に角證文の一件を忘れぬが善い。

リサウ これ、よもや和主は期限に後れたからとて、アントニオの軀の肉を截り取る氣ではあるまいナ。人間の肉を取つて何の役に立つ。

シヤイ 魚の餌にでもしてくれる。イヤ格別食料にはならぬにしても、この日頃積り積れる復讐心には、あれに越した御馳走はムらぬ。彼奴拙者に侮辱を與へ、拙者に五六十萬兩の損耗をさせた。拙者が損をすれば

笑ひ、拙者が利益を獲れば嘲り、拙者の同胞を輕侮し、拙者の取引を妨害し、拙者の朋友を疏外し、拙者の怨敵を唆かした。して其理由は何か？單に拙者が猶太人であると言ふ迄に過ぎぬ。猶太人に眼がないか。猶太人に手がないか。其他耳目口鼻身體髮膚、四肢百骸、喜怒哀樂の情念がないか。吾等として同一人間、同一の食物を食み、同一の武器を以て傷けられ、同一の疾病に罹り、同一の醫藥を以て治療され、同一の冬と夏とに由りて、或は温められ、或は冷さるゝ事、耶蘇教と何の差異がある。吾等とても雖も刺さるれば同じく血は流れる。指もて擦らるれば同じく笑ひ出す。毒を飲まざるれば同じく斃れる。之と同じく侮辱を受けて復讐をせずに置かうか。他の凡ての點が卿達と違はぬ以上は復讐の點に於ても卿達に類似するに何の無理がある。今若し吾々猶

太人が耶蘇教徒の一人を侮辱せば、その耶蘇教徒は何を致す。無論復讐ぢや。さらば若し、耶蘇教徒が吾々猶太人を侮辱する上は、右の模範が模範、無論復讐に決つて居る。拙者は卿達が教へてくれし魔道をば他まで實行致す決心ぢや。イヤ模範以上に立派に改良してお目にかける。

下男の一人登場

下男 旦那様方は其所に御在になりましたか——主人アントニオには只今在宅貴所方御兩所に、用談の件があるとの儀にムりまする。

リサウ おゝ拙者ども、實は彼方此方御主人の行衛を捜して居た所。
ニソウ オヤ、猶太の眷族が又一人殖えた。こりや耐らぬ。悪魔でも煩は

さなければ、とても彼奴どもの敵手にはなり兼ねる。

とソラフニオ、サラリノ及ビ下男退場

シヤイ　おうチュバル無事であつたか。ジニアから、いかなる消息を齎してまゐつた。娘の所在は見附けて呉れたか。

チヌバ　はアお嬢様の風評のする場所へは屢々参りましたが、その所在はツイ突き留め兼ねました。

シヤイ　こ……これで、彌々依みの綱は断れ果てた！ 到頭あの金剛石が――あのフランクフルトの町で、大枚二千兩を擲つた品物が水泡になつた。あゝ斯んな災厄はまだ吾々同胞の上にも落ちかゝつた例はない。斯んな災厄は身に受けた例もない。あの一品で二千兩。その外眼球の飛び出るほど、價の高い寶石が幾個も失せた。嗟、娘が縦令脚下で

死なうとて、身に寶石類さへ附けて居て呉れ、ばまだ断念の法もある。又脚下で柩車に收められやうとて、その棺桶の内に貨幣さへ入れてあらば、まだ餘程嬉れしい筈。フム出奔した二人の行術は皆暮知れぬのぢやな。これは先づ致方が無いとして、行術搜索の費用が幾何ほどの大金に當んだらう。チュバル汝は忌々しい奴ぢや。損の上塗をしある。逃げた盗人の攫つた金額がしかく、盗人搜索に使用つた金額がしかく、その癖無念も晴れねば、復讐もとれず、不幸といふ不幸が皆この双肩に懸るばかり。吐く溜息に絶間なく、流るゝ涙に留所なく、あゝ何といふ因果な身の上ぢやらう。

チヌバ　何んの、旦那様、他人の身にも随分不運なことは御座ります。ジニアにて承る所によれば、あのアントニオが……。

シャイ 何……何んぢや？不運な事ぢや？不運？

チュバ 船を一隻難破れたと言ひますナ、トリポリスからの廻航中に。

シャイ ヤーレ、ヤレ難有し辱なし。して、それは事實か。確かに間違はないか。

チュバ 拙者はその難破船から命拾ひをした水夫の二三と、現に言葉を交

へて來ました。

シャイ 御手柄、チュバル大きに御苦勞ぢやつた。誠にこれは耳寄りの

吉報ぢや。何よりの御慶事ぢや。アハ、何所でそれを聞き込んだ

？ジエノア？

チュバ さアそのジエノアでムります。御嬢様は、ジエノアの町で一夜に八十

兩の大金を撒いたと申すことでムります。(とわざとあら)

シャイ ウームその一言腸が寸断れるぞい。金子を取り戻す希望みの綱は

これで彌々断れた。たつた一度にチコロリ八十兩！物の八十兩！

チュバ それから歸途には、アントニオの債主連とジエニスまで同道しまし

たが、何れもアントニオは、破産の外に道はないと申して居りました。

シャイ そりや何より善い事を聞いた。これから彌々彼奴を惱めて呉れる。

散々拆檻してくれる。そりや何より善い事を聞いた。

チュバ 所で同伴者の一人が、拙者に一個の指輪を見せましたが、その指輪

こそ、猿一疋を以て、御嬢様と交換したものぢやさうで。

シャイ エ、あの親不孝奴ッ！何うして呉れう。イヤ併しチュバル汝は俺を

散々酷い目に逢はせる。其指輪といふのは、土耳其玉箱入の品(一種

石にして、在時は其色を見て、未だ俺が獨身で居た折に、亡妻よりの贈物

であつた。これが何で猿の一疋や二疋と換へてなるものか。亞弗利加

中の猿全躰とも交換されぬ。

チニバ　でもアントニオの破産は、あれは事實でゐる。

シヤイ　それは全くその通りぢや。それにいさゝかも相違はない。チュバル汝は早く執達吏を依んで呉れ。二週間以前より約束して置いて呉れう。シテ若しもアントニオ奴が、期限に後るゝが最後彼奴の心臓を抉つて呉れる。彼奴がヴェニス市から失せさへせば、それで初めて天下太平、思ひ存分、大手を振つて商法が出来るといふものさ。アチュバル急いで参れ。何れ後刻祈禱所で逢はう。急いで参れ。場所は祈禱所であるぞ、チュバル。

と兩人退場

第二場　ベルモント　ポルシア邸の一室

マッサニオ、ポルシア、ガラチア、アノ、テリサ、及び従者登場

ポル　嗚呼今少時お待ちなされませ。抽籤を餘所に、一兩日御逗留なされたとして、それが何の御差支になりませう。若しも籤をお引き遊ばして、それが萬一外れもせば最うこれが永久の訣別、二度とお目もじは協はぬ身。それ故何卒しばし思ひ留つて戴きますわいなア。戀の何のといふ意は微塵もなけれど、貴所様とこのまゝ離れゝくなる氣はせぬ。お了解になりましたか。憎いと思はゞ、言ふまでもなく、斯かる事は申しませぬぞい。それにしても、これだけでは、若しやまだ貴所様の腑に落ちぬやも知れぬゆゑ——と申して、乙女のかなしさは、たゞよく

よと胸に所思を疊ひばかり。——喃バツサニオ様、協ふことなら、尙ほ一
 二ヶ月の間、貴所さまをお留め申して、その後抽籤をして戴きたいと
 の、妾の願望にムりまする。何れを引けば當る、當らぬ、そを知らせんは
 易けれど、さありては立てし誓詞を破る道理、こればかりは言はれま
 せぬ。言はねば、貴所様が御抽損じをなさらぬとも限りませぬ。若し左
 様のことにもならば、縱令誓詞を破るとも、秘密を漏らしたらばと、後
 に後悔せんは必定。ホンに惜い、は、貴所様の御眼、その涼しいお目元
 に魅られしばかりに、妾の身は、兩個に斷れ、半分は貴所様の側、に迷
 ひ、他の半分は貴所さまのお膝元——アレ半分だけが自己の所有とな
 がつて居ります。最も妾の所有なら、結局は又貴所様の所有、この身
 一個は悉く貴所様の所有で、ムんすぞいなア。さるにても、真正の主で

ありながら、中に妨害の關があるとは、何とまあある甲斐もなき浮世
 で、ムんせう。たゞこれゆゑに、世所様の御手に入るべき妾の身が、それ
 なりになつて居るぞいな。若しも萬一として、抽かれし籤の外れもせ
 ば、言ふまでもなく、そは運の神の過失、妾の謎とは思召すな。アレ妾と
 したことが、つい浮々と長文句、お宥怒なされて、くだされませ。詰りは
 これも出來得るかぎり、時刻を延ばし、隙を費して、貴所様に抽籤をさ
 せまいとの果敢ない願望。

ハッサ それに近頃迷惑とく、抽籤を許して戴きます。今のまゝでは、拷問
 臺に上されし苦痛、生きた心地は致しませぬ。

ホル それならば、お出でなされませ。妾の肖像は三個并べたる手筈の一
 個に入れてムりまする。眞實貴所様が妾を愛しみてたもるなら、よも

抽損じはなさらぬ筈さ、ネリサ其外何れも遠く離れて居やシテ、パッサ
 ニオ様が鏡を抽かるゝ間は、管絃を奏づるやうに聞けるが善い。若し
 運拙く、抽きたる鏡の外れもせば、音楽の妙なる聲に送らるゝ。郎君の
 姿は、歌に消え入る白鳥の末期のさまがさながらに思はれやう。(白鳥の死に類して歌ふことは古)折から溢るゝ妾の涙は、瀑津瀬をあざむき、浮
 きて流るゝ水鳥の死の床にはよい配合。若し又鏡が當るとせば、これ
 にも音楽は無上の景物——新に國王の御座につく時には、有司百官音
 樂の囀子に連れて禮拜するとかや。又一生の晴れの結婚といふ日の
 朝ぼらけには、新郎の眠れる窓の下にて、琴瑟を掻き鳴らし、覺て嬉れ
 しき大禮の當日を告ぐるとや。それにしても、アレ覽よ郎君の姿の
 見事さよ。往古希臘の勇士アルシデーズがトロイの國に在りし時、懐

性として海神に供へたる、美女を取り戻したる折の姿もかくや。(シアル
 ギズは希臘のハイキュリイーズ也。トロイ王ラオメドン海神ポセイドン
 の感情を害するや、海神怒りて一個の怪物を送りて國土を劫掠す。トロイ人之
 ルシテ、メムとして時々處女を怪物に供す。たまに今妾の身は、さなが
 らその犠牲の少女、又ネリサ達は、件の怪物に愛娘を奪はれたる、トロ
 イの女房どもが、怪物退治の首尾はいかにと、泣き眼らせる眼に眺め
 入りしに似もしやう。いざパッサニオさまとくく、抽かれよ貴所様一
 人に死なせはせぬぞい。それにしても、局に當る貴所様よりも、それを
 眺むる妾の苦勞は又格別。

と樂聲起る。その間にパッサニオは笛につきて白問白答す

歌

浮氣といふはさて何んなもの、

胸に宿るか頭にあるか、
誰の手にかけて誰が培ふた。

さア何うぢや〜

浮氣ア目のもの眼の芽生、

眼に見る中こそ枝葉も茂れ、

一と眼見さればつい枯れ果てる、

枯れた浮氣の野邊送り、

何りや葬式の鐘撞かうか。

さアぢやんぢや〜

一同 さアぢやんぢや〜

パツッ して見れば外観なるものは些も當にならぬかも知れぬが、それに

も懲りず世人は裝飾の爲めに欺かれて居る。例へば之を法律に見る
——いかに無理非道の訟訴にても、美辭佞辨を以て、その罪惡の掩蔽
されぬことはない。例へば之を宗教に見る——いかに排斥すべき邪
説にても、威容儼然たる老僧が、經典を楯にとり、尤もらしい難有味を
つけて、その汚點を美衣の下に包み得ぬことはない。又いかなる惡漢
も、その外貌に多少君子の假面を被らぬ程、愚なるはなく、さてはかの、
臆病未練の不覺者、砂もて築ける階段の、踏めば崩るゝ不用骨を持ち
ながら、顎に生いたる虎髯の、威風をさ〜四邊を拂ひ、古昔の英雄豪
傑にも、つや〜劣らぬ面魂をして居るもよく見受ける。但しその肚
裏に立ち入れば、その肝臟は多く乳色（在時の人土は勇氣は肝臟に在り
と、思惟せり。赤色を勇氣の證兆と
せらるゝに出でたり）その口邊の飾り物は、たゞ世の白痴を嚇かす爲めの

品に過ぎぬ。又かの美人といふも多くはこの類。美といふは、つまりその化粧品、秤器にかけて賣買が出来る。シテ其塗りたる鉛白の、目方が加はれば加はるほど、氣がフラクと浮くといふは、これは誠に天下の奇觀。又かの黄金の髪、房々と風に戯れて波動を作る風情は、いかにも人の心をときめかせど、よくく瞳を据へて見れば、それは被れる鬘の毛、他人の頭の譲り物。此毛を生やせし正眞の頭は、とくの昔に墓場の露、一片の骸骨と化けて居ることが往々ある習ひ。是等を以て考ふれば、裝飾品といふものは、詰り、陥むに危き深淵の崖。又豈女の醜を包む錦繡。約めて言へば、狡猾なる時世が、智者賢者の嫌ひなく、一網にかけんための係蹄ぢや。かるが故に、汝燦爛たる黄金、飢いても齒の根は立たぬ食餌。汝に最早用はない。(アリテ、爾るも物皆黄金に化す。故



第三幕第二場

「……たし致定選を之は余ッさ」リッパ
 「……せはあしの日今ふいと何ッま!はてさ」ルボ

神力を授けられしが、唇に當れば食物まで黄金に化す。次ぎにその色生白
るに窮し、終にこの神力の願下けをなせざる古語あり。汝銀汝にも用はない。(銀は通例貨幣なるが故に此語あり)
く、平生人間の奴隸に甘ずる。汝銀汝にも用はない。(銀は通例貨幣なるが故に此語あり)
が、打ち見る所甚だいやしく、甘言を以て人を欺ばさむよりも、寧ろ冷
々として人を威嚇するの風ある。汝鉛の手筈、汝の飾りなき點が、千百
の甘言美辭よりも余の氣に入つた。さア余は之を選定致した。神も守
れやわが身の幸を！

ホル (旁白) さては！ まア何といふ今日のしあはせ。迷ふ心の疑惑も、胸を
痛めし失望も、戦慄も、畏怖も、寂びしい眼光の客氣の鬼も、一時にばッ
と雲霞手も舞ひ足も踏み外す——ハテこりや慎まねばなるまい。う
れしさに過ぎてはならぬ。控へやう、耐へやう。うれしさが勝ち過ぎる。
嬉れしさに食傷らぬ用心せねばならぬ。

ハッサ、さアこれは抑も何物ぢや?

と鉛の手筈を開く、

やッこれはボルシア姫の御肖像! 似るも似たり、描くも描いたり、何所の名手がなせる業ぞあれ! 動くか、その皿は? それとも我が皿の上に映りて、動くが如く見ゆるのかや、これなるは蒸ばしき氣息の通ひ路、半ば開ける蕾の唇——イヤ開く筈ぢや、かくも涼しい氣息に打たれて、いかなる關の戸の開かず居やう。や、頭髮の中には、書工の筆が蜘蛛の工を奪ひ、黄金の網を組み合はして居る。蛸を捕へる蜘蛛の巢よりも、さぞや男がかゝりもせむ、とりわけ優れしは左右の眼畫工はよくも眼を開いて、かゝる兩眼を描きあげたもの。一方を描きあげる頃には、自己の兩眼が明を失ひ、ツイ竣工に及ばずして終りさう

なものぢやが、これは又格別! (アとボルシ) わが形容の詞か、繪の眞價を損へるが如く、繪は又その御本体を損ふて居る。ちゝ爰に一片の巻紙がある。これぞわが幸運の總目錄。どりや……

外觀をたよるな、依とせずば、

運はち主の身について来る。

拙いて當てたるち主の運よ、

不足言ふまい、氣移りすまい。

中身のものが心に協ひ、

可愛のものと思召すなら、

共白髪まで添ふ仲ぢやもの、

しるしのキスを惜み玉ふな。